

犬を育て犬と育つ

長崎史明 著

【はじめに】

盲導犬の育成には仔犬の繁殖から老犬のケアに至るまで数多くのボランティアの協力が不可欠ですが、中でもパピーウォーカーという生後50日あまりの仔犬を約1年間育てる仔犬飼育奉仕家庭の存在は訓練を進める上でとても重要な役割を担っています。

25年にわたり盲導犬の訓練に携わった中で、最後の4年私はこのパピーウォーキングのスーパーバイザーを担当しました。

一頭でも多くの盲導犬を提供するために、またそれぞれの家庭で育てた愛犬が盲導犬になるようパピーウォーカーはとても熱心でした。

しかし、1年間のパピーウォーキングを終えてもその内のおよそ半数は、訓練に入る前の適性評価で落ちるか、訓練途中でキャリアチェンジになるなど厳格な選別が待っています。

実は盲導犬に向くかどうかの適性は生まれながらにそのほとんどが既に決まっていますが、仔犬の内はそれを的確に見定めることが難しいため、すべての仔犬をそれぞれのパピーウォーカーに預け、健やかにそして人間社会で暮らす上で必要な社会経験を積ませていただいているのです。

では、パピーウォーキングの途中で適性のない犬は判るのでしょうか？

これが曲者です。

氏より育ちという言葉があるように、盲導犬の適性には恵まれなかったものの家庭犬としてはとても良い子に育ててあったり、後に優れた盲導犬になった犬が、実はパピーウォーキング時代には家族の手に負えないような犬に育てられていたりします。

結果的には氏が勝ったのですが、家庭で育てられていた時点での評価は全く逆になっていることもありました。

つまり、『盲導犬の適性』と『暮らしやすい家庭犬』に育つ要素は別のもので、適性を後から持たせるのは難しいけれど、家庭犬として暮らしやすくおりこうな犬は育て方によって作ることが可能だということの意味します。

その犬本来の性格や適性をはっきりさせるには、それぞれの家庭で育てられた犬たちをまったく別の環境、例えば訓練所の犬舎などに収容し、数週間におよぶ検査が有効で、この検査にかかる長い時間が少しずつその犬から『育ちの部分』を剥ぎ取り『稟性』すなわち氏・本性を顕わにしていきます。

ですから私が勤務していた北海道盲導犬協会では、パピーウォーキングを終えたあとにおよそ3週間の適性評価を行い、盲導犬になる資質を備えた犬を選抜していました。

さて、適性は生まれながらとはいえ、盲導犬訓練施設では1頭でも多くの優秀な候補犬を必要とするため、育て方で犬の適性をカバーするという僅かな可能性を求め、パピーウォーカーに対してもその視座からの指導が行われる傾向にあります。

パピーを担当した私の1年目もそうで、「盲導犬にするために一緒にがんばろう」と意気込んでいたものです。

しかし1年後の適性検査が終わり、不適格になった犬たちと熱心に努力されたパピーウォーカーの落胆を目の当たりにした時、次の年からはとても『盲導犬にするための仔犬の育て方』を前面に出すような指導はできませんでした。

「盲導犬になれないのは自分たちの育て方が悪かったからだ」
このような自責の念を、パピーウォーキングというすばらしい奉仕活動の最後に感じて欲しくない、という思いがこみ上げてきたからです。

そこで視点を換え、『盲導犬になるための犬』を育てるのではなく、『一緒に居て楽しい犬』を育てることに目標を絞り、その中に盲導犬になる犬がいれば儲けもの考えるようにしました。

その為にまず、本書の原型である『パピーウォーカーのための仔犬の育て方』というテキストを作り、書き出しには「皆様の愛犬が盲導犬になるかならないかは、天に任せましょう。盲導犬になってもペットになっても、その犬と暮らした人が楽しく幸せを感じるような『豊かな感受性』と『基本的な躰』を身につけた犬になるよう、また、防ぐことができる病気や事故から仔犬を守ることができるよう共に協力しましょう。」と記しました。

方針が理解され始めると、犬を飼うのが初めてのパピーウォーカーでも表情がとても明るくなり、講習会も楽しいものになりました。

その結果、犬たちはのびのびと育ち、さらにイエストレーニングという『聞く耳を持った犬を育てる』プレトレーニングプログラム（訓練前訓練）を用いたことで、人の話に耳を傾ける犬たちが誕生し、まずは『暮らし易い家庭犬』への道が開いたのです。

こちらが戸惑うような反応もありました。

『一緒にいて楽しい犬』が育ったおかげで、適性検査に落ちるのを心待ちにし、不合格を告げる電話の向こうで大喜びしている声が聞こえていたのです。

不適格になった犬はパピーウォーカーが優先的に引き取ることができるので、これには本当に困惑しましたが一方では爽やかな気持ちにもなりました。

キャリアチェンジとなって一般家庭に引き取られた犬の中には、人の癲癇（てんかん）発作を事前に察知し家人に知らせる犬もいましたし、セラピードッグになった犬もいます。

「こんなすばらしい犬を本当にありがとうございます。今では近所の評判犬でとても幸せに暮らしています」と喜びの電話をくれる方もおられ、これもまた立派な社会貢献なのだなと思ったものです。

これらのことを可能にしているのは、『悲観することない』犬のしたたかさと『あらゆる環境を受け入れ、その中で自分に最も都合のよい状況を引き出す』才能を彼らが備えていること、そして何より『パピーウォーカーの方々から受けた愛情』やそこから生み出される『人間への絶対的な信頼』があったからだと確信しています。

さて、本書は何か特別な訓練を意識したいいわゆる訓練読本ではありませんが、犬と暮らすことを夢見てこられた方々に、私の拙い経験を元に『育て方の基本』と『将来予見されるトラブル』を未然あるいは最小限に押さえる方法をお伝えすることで、『暮らしやすい犬』に育てるためのちょっとしたお手伝いできればと願って書いたものです。

育児書みたいなものですから、成犬になってからの問題行動解決の方法を期待されている方には物足りないと思いますが、犬と暮らすうえでのひとつの基本をお伝えすることで、そこからいろんなバリエーションが生まれ愉快的な家庭犬が育てばうれしく思います。

気負わず怠らず、愛犬との楽しい生活が送れることを願ってやみません。

[豆知識・盲導犬のこと]

日本人のおよそ400人にひとりが視覚障害者で、その内約8割の方が人生の途中で障害をもたれています。

増え続ける糖尿病による受障がトップを占めており、その意味からもこれからの増加が懸念されます。

視覚障害者を安全に導くための盲導犬は、第1次世界大戦後（1916年）からドイツで系統立った訓練が行われるようになり、アメリカ・イギリスなど世界各地に広がりましたが、日本で国産第1号の盲導犬が誕生したのは1957年（昭和32年）でした。

2006年3月現在、国家公安委員会から指定を受けた9施設10ヶ所の訓練所が日本各地にあり盲導犬の育成に努めています。

Aさんは32歳の頃病気で目が見えなくなり、ふさがちになっていました。

外出するにも家族の助けが必要でしたが、幸いにも家族は協力しAさんの生活も落ち着いたかのように見えました。

しかし、しばらくすると家族の都合や機嫌を伺いながら、手助けを期待している自分に気づきました。

「本当に情けなく、つらい日々でした。ひとりでは何もできない自分を思うと生きている価値があるのかと考えました。

そんなとき盲導犬の事を知り、藁にでもすがる思いで申し込んでようやく手に入れたのがこの子です。

今では、この子となら何処へでも行けそうな気がしますし、実際今までできないと思っていたことにチャレンジしてみると意外とできることが多く、自分でも驚いています。

何よりこの子が来てから家の中がパッと明るくなり、家族の絆が取り戻せたように思います。本当に感謝しています。」

皆さんの愛犬を盲導犬にすることはできませんが、盲導犬と同じような感性を持った犬に育てることは可能です。

是非チャレンジしてみてください。

第1章 犬を飼う前に

本書ではすべての犬種が対象ではなく、私の知識が及ぶ主にレトリバーを念頭に展開していますが、同じ犬属である以上、他犬種においても多くの共通する事柄を含んでいます。

ただ、その判断と応用はそれぞれの犬種の愛好家でもある読者に委ねたいと思います。

1. 犬と暮らすということ

室内飼育が前提

レトリバーの魅力はなんといってもその優れた知性と豊かな感受性にあります。

本来鳥猟犬である彼らは愛玩犬としてはもとより、盲導犬・災害救助犬・警察犬・麻薬探知犬など幅広い分野で活躍しており、中でも盲導犬は視覚障害者の社会生活を円滑に営むために訓練されたことを考えると究極の家庭犬であるとも言えます。

この盲導犬の育成に重要な役割を担っているのがパピーウォーカーと呼ばれる仔犬飼育奉仕家庭であり、そこでの室内生活と社会経験がレトリバーの知性と感受性をさらに豊かなものにしていきます。

盲導犬には長い訓練期間が必要だと思われがちですが、彼らは訓練開始後、5ヶ月から7ヶ月でその仕事を覚えます。

- ① 難しい作業を要求しても、試行錯誤を繰り返し、一度覚えたことは忘れない。
- ② 例えば、道路に置かれた板は障害物として回避するが、同じ板を溝に渡せば橋と判断する。
- ③ 命令には従順だが、従えば主人(自分)が危険になる場合、その命令は無視する。
- ④ 昨日行ったカフェに勝手に誘導するという気配りとも茶目っ気とも取れる行動もし、ある意味で人間的な彼らと一緒に暮らす人も癒されることが多い。

何故このようなことを書いたかということ「やっぱり盲導犬になる犬は違うなあ！」と、皆さんを感心させるためではなく、むしろほとんどの犬たちがこのような作業に必要な感性を持つことができるのだということをお伝えしたかったからです。

前記の①から④は次のようにも読み取れます。

- ① 晩のおかずにとコンロの上に置いた筈のイモの煮っ転がしが、洗ったばかりのお鍋のように綺麗になっている。

そういえば昨日も仏壇に供えたおはぎが留守の間になくなっていたが、お水もお花も倒れてはいなかった。

でも、いつもは帰ってきた時大喜びするあの子が昨日今日とお出迎えもせずこちらに背を向けて寝ている。

- ② 頭にきたあなたは新聞を丸め、背を向けたまま寝た振りを決め込むあの子をビシバシ！

いつもは抵抗するのにこの時ばかりはあなたの怒りが収まるまでじっと耐えている。

しばらくしてほとぼりが冷めた頃しっぽを振りふりあなたに擦り寄ってくる。

その口にはさっきの丸められた新聞がしっかりくわえられている。

③ 機嫌を直したあなたが「お散歩」と言ったとたん玄関でお座りして待っている。

この2日間のいたづらをすべて許してもらったと思いつつも、念のためいつもよりおりこうに歩くあの子。

散歩の途中で橋にさしかかり欄干から下を覗き込むあなた。始めは一緒に見ていたあの子は徐々に不安になる。

そしてあなたの一言で次第に後ずさりする。

「食べたなあ。」

④ 帰りにはわき見もせず寄り添うようにおとなしく歩き、交差点ではお座りするという気配りも忘れない。その様子を近所の方に褒めてもらったあなたは鼻高々。

こんな光景が現実になるのも室内で一緒に暮らしているからこそです。

だから犬は室内で飼いましょう！とても明快です。

盲導犬がその訓練を7ヶ月程度で終わることができるのは、人間に対する愛情と信頼感を仔犬のうちから学び育まれているからです。

室内飼育、とても大変なことです。これだけで成功の半分は手に入れたようなものなのです。

無論、別の目的や本来のイヌとして飼う場合の外飼いを否定するものではありません。

相応の被害は覚悟すること

ゴールデン（一部を除く）はともかく、盲導犬をイメージしてラブを飼った人のどれだけ多くの方が「こんなはずじゃなかった」と嘆いておいでだろう。

恐らく8割以上になると想像しています。

実際、3才位までのあの荒れようは、賢さと将来に向けた感性を培うのに必要な、脳内での化学変化に起因するエネルギーの大爆発ではないのかとさえ思わせる凄惨さがあります。

まだ乳歯の可愛い頃、あなたと家族の腕や足は傷だらけの状態でしょう。

少し成長すると家具や絨毯、床材から衣類、鉢植えに至るまで、もしあなたが何もしなければシロアリを招き入れたかのごとく破壊され尽くすでしょう。

5ヶ月を過ぎる頃からはそこに知恵が付き、家族の留守を狙ったり特定の人の靴や服を齧るなど確信犯的ないたづらが増えてきます。

さらに成長し生後8ヶ月を過ぎようものなら、家族の誰かに捻挫いや下手をすれば骨折まで覚悟した散歩が待ち受けています。その上、通りすがりの人に飛び掛り、万が一公園で離そうものなら数人が被害にあい、あなたの元にはたくさんの請求書が届くことになるでしょう。

その頃になってあなたと家族は行く末を思い、大きな決断をすることになります。

手放すか外に繋いで番犬にするかです。

ここまですら読んで「こりゃ、ダメだ」と思う人は、ラブラドルを少なくとも室内で飼うのをやめたほうがよろしい。

ある程度の覚悟を決め、少しワクワクし続きを知りたい人は先に進むべし、です。

変化を覚悟すること

普通ならこのような状況に手をこまねいて静観したり、ただおどおどするだけの家族は少ないでしょうが、実はそのような家族こそラブを室内で飼うべきだと思います。

あなた方はもう少し野生を取り戻し、生き物と真剣に対話すべきであると考えます。

民主主義や理屈だけで動物は生活しているのではないことを知り、自らの生命の力を感じ取るでしょう。そして変化が訪れます。

第1期：仔犬が加わることで家族の会話が増え、笑い声が断然多くなり、父親もそれに参加できるようになります。

第2期：子育ての大変さのあまり奥さんが悩み始め、もしかしたら家族に八つ当たりをするかもしれません。

第3期：子供たちが母親を助け手伝うようになり、ある日、犬の安らかな寝顔に気付いた奥さんは吹っ切れたように度胸を据えるようになります。

第4期：家族それぞれが言葉に力強さを持つようになります。ご主人の発言権は明らかに低下し、その分奥さんに回りますが、ご主人はそれを不服には思わなくなります。

家族の会話も行動も犬と共にというのが当たり前の生活、しばらく続く安定期に入ります。

第5期：老後の介護とペットロスの時期です。自分たちの人生とこれからを真剣に考えることができる、愛犬が残してくれた最後の贈り物です。

このように、たかが犬と暮らすということが家族に大きな変化をもたらすことになります。

アドベンチャーに憧れながらも平々凡々の生活に退屈している人。

親子の断絶を何とかしたい人。

実は犬が好きで子供の情操にも関心がある人。

まじめ過ぎる性格に変化を求めている人。

ただし犬を飼う環境である人たちが条件です。

それがどのような環境であるかは本書の中で自然と理解できる筈です。

余談ですが、もしこの本を読んでいるあなたが子供で、身近な犬をどうしようか迷っているなら、どんなことをしても例えば親に隠れて近くのすみかや空家ででも犬を飼いなさい。何とかしてやる！の気概をもってがんばればその答えは大人になったら解るから。絶対に！

盲導犬のパピーウォーキングであればなおさら良いでしょう。

あなたたちには必ず変化が訪れる。それも明るいほうへ。

そして、ただ犬を育てていたつもりが実は犬と育っていたことを実感されるに違いありません。

知り合いにラブを飼って1年で離婚した夫婦がいました。

「離婚したさ！」と僕に告げる奥さんの声と表情は勇気にあふれとても生き生きしていました。

特に男性は、女性と自分の生活の変化を覚悟し、適応する努力をしたほうがよさそうです。

2. 仔犬選び

「はじめに」でも書いたように盲導犬の適性というものは生まれながらにして持ち合わせていることが多く、それは優れた繁殖犬の組み合わせによって維持改良が行われています。

訓練すれば最高の盲導犬になるだろうという犬を繁殖に回し、目先の1頭より将来の盲導犬を育成することを念頭においています。

それほどに繁殖というのは根幹を成すもので、優れた素質を持つ犬を担当した訓練士は、時にベテラン訓練士よりも優秀な盲導犬に仕上げますし、何より使用する視覚障害者にとって、とても扱いやすく暮らしやすい盲導犬となります。

しかし一般に私たちが手に入れる仔犬というのは、時の流行であったりペットショップで目があったとしてもその場を去りがたく購入した仔犬であったり、人から頼まれたり、捨て犬を見かねてという理由で、親兄弟の素性すら知らないで暮らし始める場合が少なくありません。

それでも良い犬に恵まれることで、また、飼い主の愛情でとてもお気に入りの愛犬になるのですが、当たり外れが多いのも否めないと思います。

そこでこれから犬を飼おうとされる場合のポイントを私なりに考えてみました。

犬種選び

流行の犬で、しかもペットショップで売られている犬は避けたほうが賢明。

基本的に流行であろうとなかろうとペットショップで犬が売られていること自体に私はこの国の犬に対する考え方の貧困さを嘆きます。

まだ肉屋さんで売られていることのほうが私には受け入れやすく、文化として対比できるものではないと思うからです。

幸いというかこのような閉鎖的な陳列スタイルが一般化しての歴史も浅いようなので、何とか環境と待遇を良くするとか、陳列の変わりにビデオで犬種の特徴を伝えた上でブリーダーを紹介するなど対策を講じてもらえないものかと期待しています。

飼い主にとって多少好都合になることがあるとすれば、彼らは雨に打たれ路傍をさまよう犬と同じように、あなたに救われたことを心から感謝し愛着を示すことくらいで、これもペットショップの販売戦略に乗っただけで仔犬の本来の性格を見る妨げになります。

路傍の犬たちには生きるために蓄えた知恵と力があるのに対し、狭いケージの中をうろうろするだけでストレスにより奇妙な行動を取るようになった犬たちはいったいどうなってしまうのでしょうか。

さて、流行の犬の場合、供給が需要に追いつかなければ大量生産を始めることとなります。その犬種でさえあれば売れるのですから、およそ繁殖には向かない犬や近親の交配が行われても仔犬のうちは見た目には可愛いでしょうし血統書というのも大して当てにならないのはもはや常識となっています。

レトリバーは人気があり、流行の犬というより定番の部に入っているのでこの傾向は低くなっていると思いますが、いずれにせよ正確な親と本来の性格を見られない欠点があります。

日頃から見ているお気に入りの犬の飼い主から仔犬を分けてもらおうとか、その方からブリーダーの紹介を受けることなどはとてもいい方法だと思います。

小型室内犬を選ぶ場合には、できるだけ早いうちから多くの人や穏やかな犬たちに合わせるなどして社会性を身につけさせないと、内弁慶で分をわきまえず身の程知らずの犬に育つ確率が高くなります。

体の小さい彼らは用心深くどちらかといえば神経質なくらいでないとかラスにでもさらわれかねないわけですから、他人や他犬に対しても慎重になってしまうのです。そして、自宅ではもちろん散歩の時など甘いご主人が側にいる時は強気になって吠え立てる犬になりやすいのです。

日本犬の場合は、基本的に売られた喧嘩を買いやすいため、多くの犬たちと遊ぶことができないと考えるべきです。特にドッグランやカフェでは慎重な対応が求められます。

ビーグルやシェルティなどは将来の吠え癖を覚悟すべきでしょうし、アジリティなどで使われる犬種やその子供たちは運動能力が高くても、落ち着きに欠ける傾向があることを理解しておきましょう。

犬と暮らす目的や生活環境、関わることのできる時間などを考慮し、そのうえで犬種を選ぶことが大切です。

とはいえ、犬好きというのはそうもいかない優しさを持った悲しい人種です。ペットショップで大きくなりすぎた仔犬の行く末を思い、自分の人間性を問われているかのような状況に陥り購入してしまうのです。

やはり生体販売などという身の毛もよだつ商売は嫌いです。

両親を見ることができれば最高

これには異論もありますが、私は内面的なものは父親より母親の影響あるいは遺伝を受けやすいと感じています。

ですから少なくとも母親を見るようにしています。

氏より育ちという言葉信じたいのですが育て方だけではどうしても対応できないことが生き物にはあります。それを知ってか知らずか私が在職中の繁殖担当者は結婚もせずには流石だったと感心する一方、どうせ父親より母親の影響だと投げやりになった私は3人の子供を授かりとてもいい子に育ったことを感謝しています。

さて初めて犬を飼われる方は、どんな犬がいいのか分からないから困ってしまうわけですが、できれば犬の飼い主と利害関係がない若しくは信頼できる専門家に仔犬の両親を見てもらい、その意見を参考にされると良いと思います。

初めての方にも分かりやすい評価の仕方を次に示します。

評価のコツ

母／父犬の家庭を訪問します。

その際、犬は犬舎なり室内なり、いつも暮らしている場所に置いておくようお願いしておきます。

訪問したら犬の吠え方と態度に注意を向けます。

① 全く吠えないで正面を向き、尾を振ってゆっくり迎えてくれる犬

友好的で最もお奨めですが自信も持ち合わせ、ひよっとしたらちょっとキツイかもしれないことを覚えておきます。

② 一声二声吠えながらも友好的でやや下向きに出迎える犬

仔犬もひよっとしたら将来その程度は吠えるかもしれません。

表情が柔らかくやや下向きの場合、感受性が豊でとても飼いやすいか、やや神経質で弱い犬かもしれませんので、この後の室内での態度を観察します。

③ 吠え立てる犬

激しい警戒心ならダメです。

よく観察して、甘やかされ調子に乗っているのか、自制できないでいるのかを見ます。

その後もすぐに吠える場合は警戒か興奮か性格かをあなたなりに判断します。

いずれにせよその程度の吠えが将来仔犬に出ると考えたほうが無難です。

吠えることは犬ならば当たり前と思われがちですが、警戒による吠えは後々問題となることが多く、また高い確率で遺伝します。マンションなどの集合住宅で飼われる場合は避けたほうがよいでしょう。

ただ、本来あまり吠えない血統の犬が特定の生活環境において吠えてしまう場合もあるのでそのあたりの見極めは専門家の範疇です。

次に訪問中の室内や外での態度を見ます。

④ 触られると嫌がる部位があるか、あるいは寝ている時に触ってみて、低く唸るような反応や飼い主が触らないほうが良いというようなことを言えば要注意です。

攻撃性の中で闘争心や凶暴なのはもちろん、嫌なことをされると機嫌を損ねやすい（普通なら逃げるか耐える）のも遺伝の確率が高いものです。

⑤ 落ち着いているか、賢そうか。見た目のこれはほとんどあてになりません。

犬を見にくることをブリーダーが受け入れてるわけですから賢く見えるに決まっていますし、自宅にいるわけですから落ち着いている割合が高くなります。深く知りたいなら歩いて確かめるしかありません。

「なんだ、そんなことか」と思われるかも知れませんが一般の方でこの程度の評価ができ、また見た目の大きさや健康状態を判断して決めるだけでも結果はずいぶん違うと思います。

警戒による吠えと攻撃性。これはとても大きな問題で遺伝の確率も高いのです。

犬と暮らすうえでこの2点がないだけで心のゆとりが違ってきます。

盲導犬が仕事中に吠えたり噛んだりしないのは訓練で教えているのではなく、初めからそのような犬は使わないようにしているのです。

ラブラドルを飼っていてその次に困るのは、落ち着きのなさです。

これは両親を見てればその程度がわかりそうですが実はそうでもありません。

この犬種を選ぶという時点で最初の数年は嵐を招き入れたと考えた方がいいでしょう。

ただ両親を見れば将来像の参考にはなります。いずれにせよ落ち着きというのは成長と飼い方によって変えることができる範疇です。

私が診るその他の項目は以下のようなものですが、もしそのようなことに興味があり正しく評価できる方はチェックしてください。

⑥ 耳、目、肘、股関節の状態（犬種特性として遺伝的な要素があります）

- ⑦ 気を取られるものとその度合い（犬・ネコその他の動物、臭い、見知らぬ人）
- ⑧ 疑り深さや神経質さ不安感の度合い
- ⑨ 感受性（声や音、身体の表面、心の内面）
- ⑩ 興奮度とわがまま度

それぞれに細かいチェック内容が含まれるのですが、残念ながら身体で覚えてきたことですので詳細を説明する術を知りません。

ただ⑥に関しては将来繁殖を考えておられるなら、後ろ足の歩様がおかしいと感じた場合、両親の股関節のレントゲン写真を獣医さんに見てもらいアドバイスを受けるべきだと思います。

それと、このことは書こうかどうしようかと迷ったのですが、やはり紹介することにしました。

もし仮死状態で生まれ、持ち直した犬や何かの関係（例えば血液型不適合）で授乳させることができない犬の情報を得たら、初乳を飲み終えた生後3日目頃からでも引き取り育てることをお勧めします。

2時間おきの授乳や排泄を促すこと、体温管理などとても大変なのですが、こうして育てた犬がとてもすばらしい犬に育った経験があり、また同様の体験を聞くことがあります。

「刷り込み」、すなわち鳥は目が開いて最初に動くものを母親と思い後を追うという現象ですが、犬にもまた別の意味での刷り込みが働くものと考えています。

健康な仔犬をそのように育てたり、淘汰されるべき犬であれば人が立ち入ってはいけない世界だと思えますが、そうでない場合でチャンスがあれば是非もう一度経験したいと思っていることのひとつです。

第2章 犬を育て犬と育つ

この章は仔犬を迎え入れてからとその後の成長段階を3段階に分けての育て方をマニュアル化したもので本書の中核を成すものです。

犬の育て方には様々な方法がありますが、ここでは私が北海道盲導犬協会で指導部長をしていた時に書き下ろしたテキスト『パピーウォーカーのための仔犬の育て方』を引用し、一部加筆改編して掲載しました。

本書を編纂するにあたりこのテキストを読み返しましたが、巻頭に書かれたパピーウォーキングの理念が、これから犬を飼おうとする方にとっても意義あるものと思えましたので、第1章でも触れましたが改めて全文を紹介します。

「この教本はパピーウォーカーの皆様が盲導犬の役割を理解していただいたうえで、仔犬を育てる過程での諸問題の予防や解決を図り、意欲と誇りそして楽しみを感じていただきながらパピーウォーキングができるよう願って作成されたものです。

できるだけ成長度合いに応じた順に項目を設けていますが、まず全体をお読みにになり概略を把握していただいたうえで、現在の成長にあった項目に戻って頂きたいと思えます。

アドバイスは概ね生後8カ月頃までとし、以降の事については軽く触れる程度で基本的には個別の対応とします。

本書をお読みにになると幾つかの点で矛盾する場合があります。

例えば委託間もないころのトイレの失敗は叱らずに、ご自分の今後の経験に役立ててくださいと書かれているかと思えば、生後70日頃には、もし失敗があれば叱るように書かれています。

これは、パピーウォーカーの飼育経験や慣れといったもので対応が変わりますし、何よりも仔犬それぞれの成長度合いや性格で変えられるべきものがあるからです。

ここで述べられていることが唯一正しい方法ではないことを、充分承知しておいて下さい。

そして何よりもこの教本自体の視点が、犬を育てるのに誤った立場にある場合が多いことを最後にお気づきください。

というのは、犬を育てる際に最も必要な『肯定的な立場』（良い面を認識し、どんどん伸ばす）に立たず、失敗やいたずら・問題行動など否定的な面にスポットを当て、そうならないための指導解説書になっているからです。

もちろんそれなりの理由はあるのですが、よい面を伸ばすというポジティブな基本姿勢は決して忘れないでください。

行き詰まりそうになった時は、

『自分と犬は楽しい関係にあるか』

『どうすればもっと良い関係になれるか』

『細かいことは気にしない。短い時間しかないこの仔との生活を有意義に過ごそう』という原点に帰って下さい。

皆様の愛犬が盲導犬になるかならないかは、天に任せましょう。

盲導犬になってもペットになっても、その犬と暮らした人が楽しく幸せを感じるような『豊かな感受性』と『基本的な躰』を身につけた犬になるよう、また、防ぐことができる病気や事故から仔犬を守ることが

できるよう共に協力しましょう。

『豊かな感受性』は室内飼育による家族とのふれあいと、家庭犬以上に求められる社会経験で培うことができます。

『基本的な躰』はそれぞれの家庭でのルールを犬に求めることとこのテキストを用いた講習会で対応します。

一緒にいて楽しい犬を育てるには、まず皆さんが楽しまなければなりません。

レッツ エンジョイ パピーウォーキング！」

という内容でした。

繰り返しになりますが、本書はドッグショーや訓練大会を目指したり、フリスビーやアジリティができる犬を育てるための訓練読本ではありません。

本当に犬を飼うのが初めてで、どうしてよいのか分からない方々に、家庭犬としての犬を育て、犬と暮らす喜びを享受し、最後にこれらの過程で自らが犬と育っていたことに思い至っていただければとの願いを込めたものです。

なお、度々登場する『社会経験』とは以下のようなことです。

- ① 人間には老若男女があり且つ人それぞれ違ったものであるということを知る。
- ② 外に出ると自転車・自動車・車椅子、時にはショベルカーやリヤカーまで様々なものがあるが、取り立てて怖がることはないということ。
- ③ 風に揺れるごみ袋も、マスクや頬かむりした人も、ヘルメットを被って大声を出す人も工事現場の音も、階段も地下道もよく見ればあるいは何度も体験すればどうってことはないこと。
- ④ 自分以外にも動物がいたり、車に乗ったり、病院に行ったり、お店の前で留守番したり、それぞれにマナーが必要だということ。

この他にもたくさんあるのですが要するに成長に応じて散歩コースを変化させ、より多くの社会を体験させるということです。

犬は僅か1年で大人になってしまいます。

それまでにどれだけ多くの経験を積み重ね、怖がるものを無くしマナーを感じ取るかということに尽きるのです。

とにかく時間の許す限り成長に合わせて場数を体験させてください。

都会の犬は田舎も、田舎の犬は都会もということです。

教えようなどと思わないで、犬が不安を感じる物を見つけたら場数とイエストレーニング（後述）を繰り返すのです。

犬にとって「おや！なんだ？」から「なあんだ、あれか」を増やすということです。

これは盲導犬だけではなく人と暮らすすべての犬種に共通し絶対的に必要なことなのです。

室内飼育と社会経験こそがあなたの犬を立派に育ててくれるでしょう。

1. 第1期 仔犬を迎える（生後50日前後）

1-1 その日から数日の注意事項

一、仔犬の扱い方

だっこは仔犬の内臓に負担のかからないようにしましょう。

猫のように首根っこを掴んだり、また両前足を持って引っ張り上げるようなこともしないように。

初めての方でもすぐに慣れますが、おなかを持ち上げたり、変にねじると腸捻転を起こすことが報告されていますので幾分の注意が必要です。

不安な方は受け取りに行った先のブリーダーや犬の扱いに慣れた人に教えてもらっておくといいでしょう。

二、自宅に帰るまで

①引き取ったあとできれば外でおしっこウンチをさせておきましょう。

②車内では膝の上で抱っこするか、一人で来られた方は箱に入れます。

車酔いがあるかもしれないので乱暴な運転にならないよう心がけて下さい。それでも時々吐くことがありますのでタオルか新聞の準備をしておきます。

冷暖房が直接当たらないよう配慮し、窓を開ける場合は仔犬が飛び出さないよう気をつけます。

③途中よだれ（粘液質ではなく、ポタポタしたたる水のような感じ）が出始めたり、気分が悪そうでしたら車を止め外に出して休憩します。

三、自宅に着いたら

①恐らく無理でしょうが、できれば外の排便場所にしようと考えている所でおしっこをさせます。（1-3

②参照）

②ペットケージを組み立てます。

ケージは成犬になったときのサイズを考慮して購入しておきます。

ラブやゴールデンなど場合は大型タイプが適当です。（その上に超大型というのもあります）

設置場所は家族が集まる居間がよいでしょう。

予め絨毯・カーペットを外し、床に傷がつかないように下にタオルケットを敷き、その上にケージを置くようにします。

ケージの中にはクッションなどを敷き、大き目の縫いぐるみを入れておきます。

③食器に水を入れて飲めるようにします。

以後水はケージの外に置いて、いつでも飲めるようにし、食事の都度取り替えます。

仔犬が食器をひっくり返したり、手を入れたりするような時はケージと壁の隙間など目立たないところに置くようにするとよいでしょう。

④室内の匂いを嗅ぎ始めますので思う存分探検させます。但し、和室には入れさせない方が後々のためにいいでしょう。

四、今日明日の注意事項

①仔犬はストレスを受けていますので今日明日は家族だけで対応し、入れ替わり立ち代わりの来客は出来るだけ避けるようにしましょう。

②ストレスや過度の興奮で水を飲み過ぎ、ウンチが緩くなることがあります。食欲や見た目に異常がなければしばらく様子を見て構いません。

これから先はせつかに名前を呼んだり騒いだりせず、穏やかに（これが難しい）言葉をかけ冷静に仔犬の行動を観察する習慣をつけましょう。

漸く迎え入れた可愛い仔犬を前に愉快的気持ちになるのはよくわかりますので、そこを少し抑えてくださいと言うことです。

③もちろん神経質になることはありません。

日常の生活音を出し、普段どおりの生活を続けてください。テレビも音楽も大歓迎、仔犬が寝ているからといってヒソヒソと話をしない方が後々の性格形成に役立ちます。

1-2 食事

犬を引き取る際に仔犬が何を食べていたのかを見せてもらい、そしてできるなら1日分のごはんを分けてもらってください。基本的にドッグフードを使用していると思いますので銘柄と価格それに何処で手に入れるかを確認しておきましょう。

ドッグフードには◇ドライタイプ

◇半生タイプ

◇缶詰・レトルトタイプがあります。

本書ではドライフードの使用を前提とします。便の状態やアレルギーなどによってフードの銘柄を変えることがあるので、最初に購入するのは1キロか3キロ程度の量にします。

どのフードが良いかは個体によって変わりますが、基本的にドライフードの中でも合成添加物や着色料・防腐剤などを含まず、複数の動物蛋白を用い、ヒトの食肉検査にも合格した肉を用いたナチュラルタイプが良いでしょう。

割高なのが難点ですが、犬に必要な栄養素は当然人と異なりますし、そのバランスを考えて食事を作るのは大変な作業になります。

現在あるフードならたとえ安い物でも日常の栄養バランスを考えて作っているとは思いますが、アレルギーや湿疹・外耳炎などに配慮し、フードは慎重に選んだほうがいいでしょう。ドッグフードを当たり前のように使ったこの30年の間に、犬たちには大きな変化がおきています。

アトピーや癌はもとより私の経験では生殖能力の減衰とそれに伴う出産頭数の減少などが感じられます。もちろんドッグフードにすべてが起因するとは言いきれませんが、食の問題については基本的に疑い、安全でより良いものを求める姿勢を保つべきだと思います。

特に日本の場合、動物飼料に対する規制・管理体制は信じられないほど甘いものになっています。

いずれにせよ、体に合ったドッグフードを使っていると便の状態や回数が安定し健康管理やトイレの躰

に役立つということは否めません。

ドッグフードには一般的に成長期用・成犬用・高齢犬用がありますが、この時期から生後8ヶ月頃までは成長期用を使います。(全年齢OKで量で調節するというフードもあります)

使い始めてから数日間は仔犬のお腹のあたりを観察し、赤い湿疹が出始めたならアレルギー反応ですのでフードを他社のものに変えるべきです。

ドッグフードについて関心のある方はそのような書籍もありますのでお確かめください。

犬に美味しいものを作って食べさせたいと思う方でも基本はドライフードで、便の状態が安定するまで以下のことを守っておくとよいでしょう。

作り方

ドライフードにお湯を入れるだけです。スキムミルクや煮干しを粉状にしたものを足してもいいでしょう。適量のフードを食器に入れポットのお湯をかけてしばらく冷ましておきます。5～10分もすればふやけてきます。

お湯の量はフードの量によって変化しますが、レトリバーのこの時期(生後約50日)はおおむね40cc以下でよいでしょう。

便がゆるくなる原因のひとつに水分量が多すぎるといのがよくあり、仔犬には強制的に摂取させることになるので気をつけるべきです。

給餌量はそれぞれの愛犬の犬種や体質によって異なります。

購入されたドッグフードの袋に印刷されている給餌量は参考程度にするのほう賢明です。

外飼いの活動犬を念頭に置いているのか、あるいは自社の犬舎で飼育している犬たちのストレスを割り引いていないのかわかりませんが、多くの場合太りすぎてしまう傾向があります。

与え方

餌を食べている犬に、近づいたり手を出したりしてはいけないよ！と言われたことはありませんか？唸りや噛みつきがあるかもしれないというのがその理由です。

でも、我が家の愛犬が将来そのように育ってしまっても困ります。

そこで以下のことをしっかり理解して必ず実行してください。

育て方で決まる明確な項目です。

犬が食事の時に唸ったりするのは本能的な面と生まれてからの経験によるものです。

上手に対応すれば本能的に唸る性格の犬でも育て方で唸らなくなる場合もあるのです。

この時期の仔犬はすごい食欲で、下に置いた食器を鼻で数十センチも押しながら食べようとします。仮に皆さんがその食器を食べやすい元の場所に戻してあげようとしても、仔犬は善意に受け取るとは限りません。

中には意地悪をされたと思いきや唸ることに発展してしまう可能性があります。

- ①食器は床においてしっかりと両手で押さえます。
- ②ほとんど食べ終わるまで指や食器を動かさないこと。
- ③残り少なくなったら指先ですくってなめさせるか、『ほら、ここにも残ってるよ。きれいに食べなさい。』などと話しかけて納得がいくまで仔犬に食器をなめさせてください。

④床にこぼれたフードなどは残り少なくなってから拾って食器に戻します。(食べ始めには決して拾わないこと)

「家族の誰が近づいても全く問題はない」と確信できるまで、少なくとも生後5カ月ぐらいまでは続けます。また、以後も時々そのようにします。

1-3 トイレのしつけ

当面の間、次の1-4『かじる』の項目と共に最も頭を悩まされる問題です。

一、この時期の仔犬の生活パターン

- ① 朝4時～6時の間に起きます。
- ② 1時間遊んでは1時間半ぐらい寝ます。
- ③ 起きているときの排尿間隔は短いときで20～40分です。(徐々に間隔が長くなります)
- ④ 夜寝る時間は皆さんの生活時間で変わりますので犬に合わせる必要はありません。

もちろん成長と共に変化しますが、初期の飼育の参考としてください。

上手な方で4～5日、初めての方でも1カ月で室内での失敗を3回以下に押さえることができるようになります。

犬の性質にもよりますが、失敗の多くは排泄前の仔犬が出すサインに気づかなかつたり、皆さんがほかの事をしていて見逃してる場合が多いようです。

でも、考えてみてください！

いつも仔犬ばかりに構ってられるわけではありませんし、仔犬にしても家族の誰かにじっと見られていたら、出るものも出なくなり、隙をうかがうようになってしまいます。

だから、多少の失敗はやむを得ないのです。

二、しつけの準備

排便のしつけとは、外の決められた場所あるいは指示された場所で排尿便がスムーズにでき、室内を汚すことなく、また予定外にもよおした際には何らかの方法で飼い主に知らせることができるようにすることです。

- ① ペットシートをケージの外(居間のどこか)に敷いておきます。

これは仮に失敗してもその上でしてくれたほうがありがたいからで、決してそこでさせることを教えるためではありません。(小型室内犬と違いレトリバーの場合は必ず外でさせます。) 残念ながらたいていの場合このシートの上にはしてくれませ　　るので、しばらくは絨毯・カーペットを外しておいた方が無難です。

結局ペットシートは吸い取り紙の役を果たすことになりそうです・・・。

もし、居間に敷いたシートの上でおしっこをするようなら、その後シートを少しずつずらして外のトイレに通じるドアやベランダの近くに置きます。

そして、したくなったらそこへ行って知らせ、徐々にトイレですするという経験を積み重ねます。

この時期、失敗が続いても短気にならず、どのような時にしたかを記録し今後の参考にしてください。

☆時間的間隔あるいは時間帯を覚える

☆遊んでた仔犬が何か用事でも思い出したかのように、ふらっと移動し臭い取りをする動きがなかったか

☆ドアやベランダの近くに行き、振り向くような仕草はなかったか

☆朝一番は特にたて続けにするもの

☆ウンチの時の肛門の膨れ具合と普段の肛門の状態との違いを観察しておく

☆食事の直後はほぼ確実にする

☆寝起きの直後は絶対にする

きっと何か特徴が見つかるはずですので、その前にトイレに出します。

②失敗させないことと成功したときの飼い主の喜びがしつけの早道です。

ある程度のしつけができるまでは、必ずだっこして外の排便場所まで連れて行きます。そうしないと途中で失敗することが多いからです。

排便場所は初めのうち土か草か砂利のあるところがよいでしょう。

可能ならば周囲があまり騒がしくない所を選びます。

積雪地帯では雪が降ればどこでもしますので、そのときは落雪のない安全な場所で、しかも夜間に出て人も凍りつかない距離のところを選んでください。

始めのうち15分から20分はトイレのしつけタイムを覚悟しましょう

三、方法と心構え

連れ出した人や周りの方が犬の気を散らす動作をしないよう注意します。(しゃがんだり動き回ってはいけません。) 特にお子さんには静かにじっとするように予め話してください。

リード(引き綱)を付けて、静かに優しく単調に『よ～しよしよし』と念仏を唱えるように何度も言葉がけをします。

この時リードは犬の後頭部に来るよう調整し、弛ませないようにします。そうしないとリードを気にして遊ぶようになるからです。

犬が跳ね回ったり、周りの物音に気を取られても動揺せず、無感動で静かな態度をとり続けます。

臭いをかぎ始めたらもう近いかも知れません。

石や草を口に入れようとしますので、仔犬があきらめるまでリードを軽く引きます。(10回位でしょうか)この時も無感動で雰囲気壊さないように、それまでと同じ言葉をかけ冷静な態度でいてください。

何かを口に入れてしまったら取り出すしかありません。また初めから仕切り直しです。

仔犬が口に入れるという動作をあなたが学び、以降あなたの予想と集中で事前に予防するよう心がけましょう。

ここをうまくやらないと「外では遊んでばかりで中に入ったとたんにする」ようになってしまいます。

ここからが重要です。

もしおしっこをし始めたら、その最中に優しく静かな声で『シーシー』と繰り返します。

し終えた時はよ〜く褒めて皆さんも軽く拍手をして喜びを表してください。

そしてまた静かな状態に戻り、今度はウンチをしている時に『ベンベン』と言葉がけをして言葉の響きを覚えさせます。

ストレートな表現で申し訳ありませんが、これが将来にわたってとても役立つのです。

例えば普段の生活で、散歩ではなくトイレだけを済ませたい時、あるいは旅行など外出先ですぐにさせたい時などにです。

ウンチの回数は食事の回数プラスマイナス1くらいです。『ベンベン』の練習は夜中に起こされた時・朝1番・ごはんの後などほぼ確実にする時間帯で練習してください。

①次に室内で失敗したときは、『あららっ！あ〜あ』と居合わせた人みんなで嫌な声を出してください。

ただし、決して叱ってはいけません。叱ってしまうと感受性の高い犬は『この人の前でおしっこはできない』と決め込み、外でもガマンして、室内の陰に隠れてするようになることがあります。

嫌な声とその後のおおらかな対応が求められます。初めての方には特に難しいようです。

床やカーペットを汚してしまった時は、市販の除菌消臭剤を使うか番茶などの茶がらで拭き取って臭いをしっかり消しておきます。

②夜は少し大変です。家族の協力が必要になります。

就寝前1時間はなるべく仔犬を寝かせないようにします。

最後のトイレを済ませて、ケージのそばに人の布団を敷いてから膝の上などでおなかを優しく撫ぜながら落ち着かせます

室内の電気を消し、仔犬をケージの中に入れドアを閉めます。が、ロックはしないで、いつでも押せば出られるようにしておきます。犬が目覚めて出てくるようなら自由にさせてケージのドアを開けておきましょう。

人の枕もとで寝るかもしれませんが、また自分でケージに入るかもしれません。

ケージの中にお気に入りの縫いぐるみがあればその可能性も高くなります。ただし、仔犬によってはケージに入れてドアを閉めても平気で寝てしまう『つわもの』もいますので、その場合は最初からロックをして試してみるのもいいでしょう。

中で少し鳴くような時は、寝ぼけたフリと口調で「こ〜れ、静かにして寝なさい。ムニャムニャムニャ・・・」というような演技を5分くらいしてみてください。

ひとつ気をつけたいことは、近い将来犬はケージの中、人はいつもの場所で寝るようにするという事です。室内ではいつもフリーにしておきたいと考えている方も、ケージで寝ることが出来るという基本は身につけておかせるべきです。犬を湯たんぼ代わりにする習慣がつかないよう、また、子離れできない親にならないように注意しましょう。

枕もとで寝てしまった犬はそっとケージに入れて、身体をさすりながら寝かせつけます。そして「ムニャムニャムニャ・・・」です。

何日か経って人は起きてても犬だけで寝るようになったら、ケージの外側をタオルケットなどで囲み中を暗くします。日中はタオルケットをたたんで明るくしておきます。

最初の1ヶ月程度は夜中に1～2度(1時と3時頃)、仔犬は鳴いたり、髪の毛を引っ張ったりして皆さんを起こす努力をします。これは尿意や便意をもよおしたため、自分の寝床を汚したくない本能が働いていると考えてください。

しつけのチャンスでもあります。すぐにだっこで外へ連れ出しましょう。

特に寒い冬や雨の夜は大変な作業です。だから家族の協力が必要なのです。

「こんな面倒なことはどうしても我が家ではできない」と言う方には、あまり手をかけないで夜を過ごす方法もあります。

☆ケージに入れた後、鳴いても『静かにしなさい』とたしなめる

☆別の部屋に行って頭から布団をかぶって寝てしまう

この方法だとトイレのしつけはかなり遅れてしまいますが、いずれ犬は室内で失敗をしなくなります。家族で検討してください。

眠れぬ夜をすごして翌日短気にならないように気をつけましょう。

③広い庭があるからといって自由に離してトイレをさせていた方も、仔犬が少し成長してくるとリード(引き紐)なしで離すのが心配になると思います。

あちこちに行ってしまうたり、草や小石をよく食べるようになるからです。

仔犬用の首輪と細いリードを必ず用意してください。そして、排便させたい場所で、人はあまり動かずに犬がリードの範囲内で動いてトイレを済ませるようにできれば最高です。

犬の動きに従って何メートルもついて行くと、だんだん苦勞します。

少々犬が引っ張ってもリードショックをして負けずに引き寄せ、数メートルの範囲でさせるようにしてください。

もし、トイレの範囲を定めるサークルなどがあれば好都合です。

これから先、生後5ヶ月くらいまでは室内でもいつも首輪をしておきます。始めは頻繁に首のあたりを搔きますが、10日もすれば徐々に慣れてきます。購入した首輪に鈴など音が出るものが付いていれば外しておきましょう。

1-4 かじる

この時期の仔犬はよくかじるものです。あまりのしつこさや痛みで小悪魔に見える時があるほどです。子供達は仔犬を怖がり、テーブルの上など高いところから降りて来れなくて、助けを求めるかも知れません。

一方、仔犬の方は好奇心旺盛。子供を追い掛け回しては泣かせ、何でもかんでも口に入れてはかじり、時には飲み込んでしまいます。

本能的な遊びの中から様々なことを学んでいるのです。絶好の遊びの対象がどうやら人のようです。

さあ、どうすればよいのでしょうか？

① 上手に付き合う

かじるのが仔犬の仕事のようなものです。

経験のある方は痛くないように犬の奥歯あたりの歯がないところに指を入れ、ある程度遊びながら犬を満足させることができます。

かじられて急に手を引っ込めるとひどい傷になってしまいますので、空いてる手で犬の口をこじ開けるようにします。

② 気を紛らわせる

かじることを完全に止めさせることはできませんが、『あ！あれは何だ』などと言っておもちゃに気を向けさせ、転がしたり投げたりして遊ぶことはできます。

この時

◎あまり興奮させないで適度に疲れさせる（いつもキャッキヤ、キャッキヤと騒いでいると落ち着きのない犬になります）

◎ 人に対してかじってきたときは、逃げ回ったり中途半端な言葉による反応をしないことが大切です。

『いやだあ！痛い！やめて！』などの言葉も、仔犬にとってはかじることで人がすごく自分に注目しているという意味で、とても楽しい遊びになるのです。

③ ダメなことを教える

例えば仔犬が電気コードをかじっている場面を想像してください。瞬間的に『あ！だめ！』と声が出るでしょう。

でもその声は隣近所に聞こえるほどの大声ではないはず。「何か特別な大変なこと」の意志を含んだ気迫が大声に感じさせるのです。この気迫でやめさせます。

いまひとつは「凄みを効かせること」です。長い説教よりドキリとさせられる威厳ある一言の経験は誰しも持っているものです。

注意事項

◎中途半端な対応にならないことが肝心。本当に怒っている「フリ」が求められます。

◎いつも大声で叱ってばかりいることのないように。

④ 秘策

これはネズミの実験ですが、グルーミングをよくする母親の下で育てられた子供は情緒が安定するようです。

仔犬にこれを試してみてください。

ここでいうグルーミングとは、抱っこしている仔犬の身体を両手の指で搔いてやることです。

噛む力がとたんに減少するはずですが。

この「体中を搔く」行為は魔法の力にも匹敵するものです。これから先、とにかくいろんな時に犬の身体を搔ってください。

実際の対応は①の上手に付き合うことと④の秘策を最も多くし、続いて②の気を紛らわせるが中心になります。③のダメなことを教えるは、トイレのしつけ同様に仔犬が家庭や家族に十分に馴染んでからでないと、また皆さんが仔犬の性格をある程度知ってからでないと対応が難しいかも知れませんが、馴染んだあとは口癖になるほど出てくるものです。

ただ、③の対応は単にかじることのしつけに有効なのではなく、決して民主的ではない犬属と暮らすうえでとても大切なことです。詳しいことは後述します。

1-5 ハウスと係留

『ハウス』（ケージに入っていないさい）を教えることは、外出するときのいたずら防止や来客時などに役に立ちます。犬にとってもくつろげる自分の空間を持つことができ、とても大切な躰です。ただし、この時期にしっかり教え込むことは不可能ですので、将来のため以下のことから始めます。

①食事は時々ケージの中で与える。その際『ハウス』という言葉をかけて響きを覚えさせる。

②ケージの中にお気に入りの縫いぐるみなどを入れておく。

③うとうとと眠り始めたら、そっとだっこしてケージに入れる。初めのうちドアは開けておき、目が覚めたらいつでも出ることができるようにしておきます。

いつも必ずというわけではありません。「そういうときもある」程度で結構です。疲れたときなど仔犬が自分でケージに入って眠るようになったら大成功です。（2カ月ほど先の話ですが）

眠くもない犬をケージに入れて買い物などで外出すると、不安のあまり中で鳴き続けることがあります。こうなるとケージを嫌がるようになりますので、できればどなたかが残るか、若しくは仔犬の睡眠パターン（1時間遊んでは1時間半寝る）に合わせて短時間で用事を済ませるようにしましょう。最初の1カ月くらいの辛抱で、その後は1人の時間を経験させることが必要となってきます。

係留について

多くの飼い主が愛犬と暮らすうえで困っていることに、室内の破壊といたずらそれに排泄の失敗がありますが、そのきっかけを作っているのは『室内飼育というのは、いつも犬をフリーにして育てること』という誤った考え方です。

そんな育て方をしたら家具やソファは傷だらけになってしまうし、メガネやリモコンは幾つも壊され、排泄の失敗が日常になってしつけはどんどん遅れてしまうでしょう。

フリーにするのは家族の誰かが愛犬の為に100%の時間を割き、いたずらや排泄の失敗を未然に防げるか或いは現場を押さえて以後のしつけに役立てることが出来る時に限られるのです。

それ以外のときはたとえ短時間であっても家族がいる居間のどこかに係留すべきなのです。

係留し、犬が自由に動ける範囲には快適な寝床とトイレシート・おもちゃ・飲み水を準備しそれ以外の悪戯される物は置かないようにします。

初めのうちは係留された犬のそばで本を読んだりテレビを見たりして、係留が特別なことではないということを経験させ、徐々に犬から離れることもあればまたそばに座るなどを繰り返しておきます。

係留時に犬が吠えたりリードやペットシートを齧るようなことがあれば、きっちり叱ってさっさと決着をつけるべきでしょう。（感受性が低く叱っても態度に変化が出ず、いい気になって吠えるわんこにはティッシュボックスや空のペットボトルを思いっきりぶん投げて『本気だぞ！』の思いを伝えましょう。）

係留経験は将来の自立心形成にも役立つし、飼い主の精神安定にも貢献してくれるはずですが。

ただし、フリーにできる時間を出来るだけ多くとってください。犬の為に100%の手間をかけれる時間を捻出してください。

このようにして育てることで生後10ヶ月頃から、見てなくてもフリーにできるという信頼が得られるようになるでしょう。

“犬のおりこうさん度が上がるに連れ、待遇を良くしていく。”

これが極意です。

しつけもできず犬の問題行動に悩まされている方が、犬を四六時中フリーにし夜は抱いて寝るとするのは

最悪のパターンです。

1-6 その他

一、だっこの習慣

甘やかしの原因になるからと否定する考えもありますが、人に対する信頼・安定(心)感・やすらぎ etc. のためにだっこは効果的です。また、体のいろんな部位を触られることにも慣らしておきましょう。

遊んだ後、興奮を落ち着かせること(クールダウン)にも役立ちます。

積極的に取り入れてください。だっこを嫌がる犬もいますので、そんなときは眠そうなときにチャレンジしてみましょう。

二、車の座席と家のソファ

車に乗る時は生後4ヶ月くらいまでは、同乗者が膝に乗せて構いませんが、その後はできるだけ助手席の足元か後部荷台に繋ぐようにします。将来助手席に乗っても構わないと考えている人でも、始めはこのようにしたほうが犬をしつけるための自分の訓練になります。

運転者1人の場合は安全を優先し工夫してみましょう。

自宅などでソファに腰掛けている時に、膝のうえに乗せたりするのは仔犬のうちであれば構いませんが、その後膝からソファに移したりせず、必ず降ろすようにしましょう。それができるかどうか、すなわち犬に対して毅然とした態度が自分にとれるかどうかの判断材料になります。

三、おもちゃ

仔犬によってお気に入りのおもちゃはそれぞれです。この時期であればスリッパや靴下、ティッシュペーパーの箱など何でもおもちゃにしてしまいますが、『これはいいけどそれはダメ』と態度をはっきりしておきます。但し、『お父さんの靴下はいいけど私のはダメ』と言うのは通じません。かじられては困る物と似通ったおもちゃは与えないほうが無難です。

飲み込みやすいもの(小さなボールや縫いぐるみの目など)は注意が必要です。また、かみ砕いてしまった物は早めに処分しましょう。

おもちゃについては成長度合いで注意事項が異なりますが日々の生活で徐々に判るはずです。

四、シャワー

仔犬の匂いは人によって好き嫌いがあるようです。特にこの時期はウンチやおしっこを踏ん付けたたりして、体を清潔に保つ必要性も高くなります。

しかし、体温調節がまだうまく機能しておらず、シャワーを頻繁に使うと感染症のきっかけとなる心配があります。

そこで、汚れた時は基本的に全身を蒸しタオルなどで拭くことにし、やむなくシャワーを使う場合は部分的かあるいは室内を暖かくして全身を洗い、バスタオルでよく拭いて素早く乾かすようにします。

仔犬の顔に直接シャワーをかけるとお風呂嫌いの犬になる可能性がありますので、顔は蒸しタオルで拭くだけにしておきます。

毛や皮膚の油脂は体を保護する役割があることを忘れないでください。本格的に全身を洗えるのは4カ月以降からです。

五、散歩

この時期の仔犬には非常にデリケートな問題です。というのは、人に会わせたり見せたり早期社会経験をさせることの有益性（犬の社会化は3週令から12週令頃に行われるといわれています）がある一方、まだワクチンの接種もしておらず、見えない外敵から仔犬の健康を守る必要性があるからです。

そこで生後60日頃を目安に以下のことに注意して対処します。

最初は散歩というより、庭先で外の様子をだっこしながら見学することから始めます。好奇心が強くなったら散歩を考えてよいと理解してください。

- ①天気の良い日であること
- ②便や見た目の元気さなど健康状態に問題がないこと
- ③外出先は室内か舗装されたきれいな場所であること
- ④不特定な犬が散歩する場所や草むらが多いところではだっこすること
- ⑤犬に会う場合には相手の犬がワクチンの接種を受けており且つ室内飼育された柔順な犬であること
- ⑥会う人にあらかじめ社会経験のためであることを告げ、興奮させたり怖がらせたりすることのないよう協力を求めること
- ⑦皆さんは仔犬の行動や態度をよく観察し、切り上げ時を決めること

このような配慮は2回目のワクチン接種後2週間までします。

なお、不安があるときは外出を控え自宅の周囲で遊び、友人などに訪問してもらうなどして様々な人に会わせておきます。その際⑥の注意をお忘れなく。

基本的な考え方は、病気になる心配はあるかも知れないが、今の時期から良心的な社会経験すなわち意図的に仔犬を怖がらせない等の配慮の上に人間社会を見せ、その上で万が一病気になったらなんとしても治してみせるという気概を持つことです。

【コラム】

犬は最初の一年で、人間で言えば0歳から17歳程度まで肉体的に成長します。本来、精神もそれに伴い成長するのですが、ショップや一部の獣医さんはイヌを単なる生体とみなし『ワクチン接種が完了するまで外に出さないように』とアドバイスします。

しかし、私たちはウサギや亀を飼っているのではなく、『暮らし易い家庭犬』を育てようとしているのです。ワクチンが完了する時期というのはすでに生後3～4か月に達し、乳歯が抜け永久歯が生えようとする頃、つまり子供でいえば小学生にまで成長しているのです。その時期まで社会と触れ合う大切な機会を与えなかったとしたら、それだけで問題児を育てるようなものというのは容易に想像できるでしょう。

健康なわんこが家庭に来たら、翌日から外の空気に触れさせ、これから生きていく社会を五感を使ってゆっくり体験させましょう。

散歩の目的は

1番がこのような社会体験で、初めて見る／聞くで仔犬は不安を示すでしょうが、根気よく励ましたりおやつを与えつつ同じ場所を繰り返し歩き、慣れてきたら次の刺激があるコースを選びます。

1年後には大都会でも田舎でも平然と歩けるわんこに育てましょう。

公園や堤防ばかりの散歩は1歳過ぎてからのんびり行ってください。

2番目が運動とストレス解消です。

そして3番目が生後4か月頃から必要になる『引っ張ったりちよろちよろしないで、こうやって歩くんだよ』という歩き方のルールを教えることです。

実はこうした散歩を続けることで、犬は成長しそして飼い主に一目置くようになるのです

犬は一年で成犬になる。最初の一年に全力投球しましょう。

2. 第2期（生後70日以降 1回目ワクチン接種時）

2-1 仔犬の成長過程

生後70日前後になり、人間で言えばそろそろ幼稚園に入る年頃になりました。

甘えやわがママを受け入れてくれる家族の優しさが最も必要な時期です。

一方ではトイレのことや室内での基本的なしつけなど、仔犬に自覚を求め始めてもよい時期でもあります。

一見相反するこれらのことを皆さんがうまく対応することで、人に対する信頼と安心が定着してゆきます。

難しいのは、まだ幼く見える仔犬を前にして飼い主の認識が仔犬の成長のスピードに合わないことです。

まだまだ赤ちゃんと思って接してしまうことです。

愛情豊かにおおらかに接しながらも、犬として室内で人と暮らすうえでのしつけを教えていく時期だという認識をもちましょう。

犬には慣れた時期だと思いますが、トイレや悪戯、寝不足などでお母さんは疲れているでしょうから仔犬の寝姿を見てご自分を癒してください。

2-2 食事としつけ

フードの量は成長に合わせて増やします。

なお、体重を量るときは犬を抱っこして量った体重から自分の体重を差し引くと量れます。

フードにはこれから先も水分を加えますが、芯までふやかす必要はもうありません。

ここでは食事の与え方についてのアドバイスがあります。

与え方

これまでは食器を両手でしっかり押さえることを実行していただきました。でも、食器を床に置くまでに飛びついたり、床に降ろす途中で首を突っ込まれひっくりかえしそうなことはありませんでしたか？

そこでこれからはマナーを教えることにします。

教える項目は「すわること」と「待つこと」です。

真剣に、集中して、気迫をもって対応してください。

ステップ1：まず、食事の入った食器を持ち、立ったまま犬と正対し静止します。犬は上を見上げることでおすわりの姿勢を自発的にとる確立が高くなります。そのタイミングを見計らって『スワレ』と命令し

ます。(命令語はオスワリでもシットでもオッチャンでも何でも構いませんが家族で統一すること)もし座らずに吠えたり飛びついたりする場合は場所を少し移動するなどして、改めて座る姿勢を誘発します。この際『スワレ・スワレ』などと命令を連発しないで、無言でゆっくりした動作を心掛けます。時間がかかる場合もありますが、犬が座るタイミングを見て『スワレ』と1度だけ命令します。初めは座る動作と命令語を結び付けさせるだけで結構ですので座ったらすぐ食事を与えます。(与える途中で犬が立ち上がってもかまいません)

しばらく(3~4日)して『スワレ』の意味を覚えたら次のステップに進みます。

ステップ2: 正対し犬が座ったら片方の手のひらを犬のほうに向け『マテ』と命令します。自分の胸、食器を持った手、手のひらという構図になります。そのままの状態ですわたりしゃがむようにします。このときほとんどの犬は立ち上がったたり動いたり飛びついたりします。あなたもまた立ち上がって『スワレ』と命令し、従ったら次に『マテ』と改めて命令してください。これを何度か(5~6度)繰り返すうちに食器を下に置くまで待つことができるようになります。『よし』と言って食べさせてください。おあずけをする必要はありませんし、しないほうが賢明です。

『スワレ』『マテ』はこのほかいろいろな場面で使うことがありますが、躑をすうえで最も重要なことは『スワレ』と命令したら必ず座るまで人が次の動作に移らないこと。そして『マテ』と命令したのに立ち上がったたり動いたりしたら、直ちに今の皆さんの動作を中断し、元の姿勢を取らせることがとても大切です。たとえ何度犬が動いてしまっても根気よくできるまで続けてください。時の流れがとても緩やかに感じ、『犬が物事を覚える過程とはこういうことなのだ』という貴重な経験をすることができます。

次に大切なことは『スワレ』『マテ』の命令の解除です。マテと言っておきながら、いつの間にか犬と歩き始めているようでは、いつマテの命令が終わったのかははっきりしません。その結果、犬はあなたの動きの癖を見抜いて、立ち上がったたりすることを覚えてしまいます。

ですから、『OK』と言って命令を解除することを忘れないでください。せっかくのしつけを台なしにしている飼い主は意外と多いものです。

2-3 トイレのしつけ

仔犬との生活に振り回されながらも少しずつ性格や行動パターンも分かり、トイレの失敗も減少してきたと思います。しかし皆無ではないはずで、1日の失敗が5回以下なら上出来。10回以下ならそんな日もある。10回以上ならもう少し注意深くと言ったところでしょうか。

これまではあらかじめ予想される状態のときにトイレに出したり、どのような時に失敗するかを観察し皆さんの今後の対応に生かすようにして、仮に失敗があってもひどく叱ることがないようにお話ししてきました。犬によっては人前でしないで隠れてするようになるからでした。

でも、もう仔犬と皆さんの双方のつながりができている頃です。まだ神経質な犬を除き、そろそろトイレの失敗があったときには、はっきりと叱ってよい時期にきています。

叩いたりする必要はありません。『コラ~!どこでおしっこしてんのさ~!』

こんな感じで充分です。それぞれ地元で使い慣れた言葉を使いましょう。

できるだけ現場を押さえる方が良いのですが、後からでも結構効果があるものです。(愛犬のしつけ書にはそう書かれていませんが、皆さんの愛犬には分かるのです。)

失敗があったとき後片付けを黙々としてはいけません。それだと仔犬に正しいことをしたと思わせてしまいます。必ず『ブツブツ』言ってください。

室内での失敗には『ブツブツ』を、屋外での成功には『エライ！エライ！シ～シ～出た～！』。

これが原則です。

トイレに連れ出すタイミングの再確認

①基本は、成長度合いに応じてしたくなる時間を見計らって出すこと。仔犬が要求してから出すのではなく、そろそろシーシーの時間だという時。（寝ている時は起きてから）

②寝起きの時や、食後あるいは不審な動作を始めた時に臨機応変に出す。

2-4 かじる

すでに皆さんの手や腕は傷だらけではないでしょうか。

しかし、これからがピークです。しかもこのピークはあと2カ月は続く厄介なものなのです。

こちら辺りで手を打たないと、学校や近所から子供の虐待や夫婦仲を疑われることになりかねません。が、しかし悲しいことに完全にやめさせることもできません。

ここではその原因と対策を再度考えてみましょう。

[かじる原因]

①仔犬は口に入れかじることで、物を確認する（どんなものであるか分かるという報酬がある）

②乳歯のうちはとにかくかじりたい（歯茎が気持ちよくなるという報酬がある）

③かじることがとても楽しい遊びであることを経験している（物をかじれば破壊でき、形を変え、中から別の物が出てきたりするという報酬がある）

④退屈な時、家族の注目を集めるにはこれが1番（家族は痛い痛いと言いつつ喜びの？声を上げ、逃げ回ったり、時には反撃しながら楽しそうに？遊んでくれるという報酬がある）

犬は知性を持つことができる動物ですが、それを獲得する以前の行動は本能によって支配され、その多くは快か不快かによって決定されています。

そうすると上記①～④はすべてに報酬があり、仔犬にとっては快を得られる正しい行動になる訳です

そこで、それぞれについての対策を考えてみましょう。

[かじりの対策]

①については、かじられては困る物に「犬が嫌うニガミの成分が混じった物」例えばビターアップル（ペットショップで購入）などをスプレーしておけば、当面は嫌な物としてかじらないかも知れません。（不快なものとして認識）ただしこの時期の仔犬はまだ味覚についての感覚が鈍く効果が低い場合もあります。

その場合にはかじれば不快になる仕掛けが有効でしょう。ガムテープが絡み付くとか、ごみ箱に紐と落下物で細工をして、いたずらすれば上から物が落ちてくるとか、いろんな工夫を考えます。もしこの仕掛けにまんまとはまったときはそれ以上叱ることはありません。

「おい！大丈夫か？」さりとてのけましよう。

②と③については正当な要求でしょうから妥協することにします。つまり、かじってよいものを与えるのです。ペットショップには様々なおもちゃが売られていますし、家の中には与えてもよい仔犬のお気に

入りがあらずです。また、犬用のガムには中から別の皮が出てきて楽しめる物もあります。

ここで大切なことは、仔犬の特に『お気に入り』の中から二つほどを選び、ある程度遊んだら皆さんが片付けておくことです。これが次の④につながります。

④の退屈は誰にでもあります。ほどよく遊び、心地よい疲れを仔犬にもたらし、皆さんの楽しみでもあります。痛くないような噛まれ方を少しはマスターしましたか。この方法は勇気を出して仔犬の口の中へ手を入れることが出来ればわかるようになります。奥歯のあたりに噛まれても痛くない場所があります。犬歯と前歯で噛ませないように工夫しましょう。

遊べないときやあまりしつこいときは例の『お気に入り』を与えて1人遊びをさせます。

この時も後片付けを忘れないようにします。

なおしつこいのが仔犬というものです。様々な工夫をして気を紛らわせるのが犬と暮らす喜びの1つです。家族がいれば協力しあつてのゲームも楽しいものです。

それでもだめなときは、やむを得ません。『ノー』と言って、ぶっ飛ばしてください。反撃の意志を喪失させることができるかがポイントで数秒のうちに決着をつけてください。

以上過激なこともあります、仔犬の性格によっては必要な項目です。

犬の身体を搔くという行為とその際の包容力・懐の広さを示すような態度それに成長がうまくかみ合うと魔法のようにこの問題は解決されていきます。もちろん、血統にもよりますが。

2—5 帝王教育

この項目の説明は時期的に少し早すぎると思いますし、いわゆるアルファーシンドローム（権勢症候群）という上下関係の理論が正しいかどうか大いに疑問もあるのですが、多くの飼い主が犬から畏敬の念と信頼を得られずに困り、そのために犬たちも限られた範囲でしか社会の中へ連れ出してもらえないことを考えると、ひとつの知識として将来のためにも今のうちに皆さんに知っておいて欲しいと考え、私なりにアレンジしたものを敢えて入れておきます。成長度合いに関わらず、今後何度も読み返し真意を理解してもらえたいことを期待しています。

飼い主の言うことを聞かない殿様お姫様のような困った犬の話を書くことがあると思います。

実は小さいときから犬にそのような帝王教育を知らず知らずにしてしまっている飼い主が多いのです。室内飼育ではとりわけその傾向が強く、犬がリーダー（暴君：普段は温和なようでも自分に不都合な指示を受けたり、自己主張したい時に人を馬鹿にするだけでなくキレる犬）になるよう我々は育てていると言っても過言ではないでしょう。食事を賄い、トイレや散歩にお連れし、じゃれたり飛びついてくれば遊んでさしあげていると犬に理解されても仕方ありません。

ご存じのように犬は狼を祖先としています。その狼は群れを作り、そこには厳然とした順位付け（力関係）が存在し、順位がはっきりすることで彼らは安心とその日の糧を得ることができるのです。

決して常に上位を目指そうというのではなく、あくまでも順位がはっきりすること、特に強くて信頼できる者が存在することが重要になります。

ところが飼い主は可愛い仔犬を前に、まるで下位の狼が上位のそれに接するときのように育てるので、仮に狼なら群れの安定を図るために飼い主を倒しボスとしての役割を果たすでしょうし、犬の場合ならば前

述のリーダー（暴君）のような意識が育ってもおかしくはありません。もともとボスの素質を持った犬ならまだしも、下位に甘んじるべき犬たち（多くの犬がこの範疇）は、その結果依存的でわがままでさらに情緒が不安定で内弁慶（まるで人間社会のオスのよう？）な、凡そ犬のボスらしくない役回りを演じることになりみんなが苦勞することになるのです。

ですから私たちは愛犬のためにも真のリーダー（この場合は畏敬の対象者）であることを意図的にしかも相手に分かる方法で毎日伝えなければなりません。

ここでは日頃の何げない対応が犬社会では上下関係を示す場合があることを説明します。

一、上位のものが先に食べる

仕留めた獲物は上位のものが先に食べるのが狼の社会です。この点で言えば皆さんは犬の食事を管理しているので優位な立場にあると言えます。しかし、食卓上の盗み食いを許したり、食事中のおねだりを要求されるがまま与えるのはよくありません。狼の社会では上位のものが食べているときに下位のものが取ろうとするとひどい目にあわされてしまいます。そのことで下位のものは横取りしてはいけないことを学習し上位者に一目置くようになるのです。犬にどう接したら分らない方の場合、自分の食事の時に膝やテーブルに犬が足をかけたりした時は明確な態度で「ノー！」と言って足をはらうべきなのです。

仔犬は凡そ3回チャレンジしてきますが、明確な拒否を！

実はこの凡そ3回というのもポイントで、この時期1回で言うことを聞かせたらそれは厳しすぎ、5回言っても聞かない場合は甘すぎるというバロメーターにしてみてもはどうでしょう。

二、上位のものが先

食べることと同じですが、家庭の中でよくあることはドアの出入りです。ドアを開けた途端犬が先に出ることを許すのは、今後の生活を考えてもやめさせておくべきです。

自信のない人はリードを付け一旦座らせて人の後に続くことを教えるか、少しドアを開け、犬が飛び出そうとしたらピシヤリと閉めればいいでしょう。鼻っ面が思いっきりドアに当たれば解決です。

三、上位のものがいい場所を独占する

ソファやベッドに上がらせるのは犬によっては独占欲を助長し、将来問題を抱える場合があります。ですから皆さんはこのような場面を発見したら、ためらわず時間をかけずに降ろしましょう。

犬がそこにいることを気付かずに人が上から座ってしまうなんて偶然？が重なれば最高です。また、通路で犬が寝ているような時には、皆さんが避けるのではなく犬が自発的に移動するようにします。成犬の中にはこのよくなとき唸る犬もいますので仔犬のうちから対応します。言い聞かせるのではなく犬につまずいたフリをするのが1番で、「あっ！ごめん」で結構です。

盲導犬は室内でご主人につまずかれたりしながら、自分から避けることそして主人の目が見えないということを知るのではないかと思うときがあります。

「そんなバカな！家の犬はソファを独占してもとても従順に育ってますよ」という読者もおられるでしょう。あなたはいい犬に巡り会えたか、しっかりした飼い主あるいはその両方なのでしょう。ここでは万が一仔犬によからぬ素養がある場合と犬にすっかり嘗められてしまう飼い主を想定しています。

四、上位のものが勝つ

狼のボス争いでは上位のものが負ければ順位は入れ替わってしまいます。

こんな真剣勝負ではないけれど、端緒となり得ることは犬との遊びの中でしばしば見られます。特にロープやタオルなどの引っ張り合いの遊びでは、人が手を離して結果的に仔犬に勝たせてしまっています。これだと潜在的な優位志向を顕在化させる場合があります。

引っ張りながら唸るようなら1旦止めて気分転換をするべきでしょう。

この遊びのコツはゲームの開始と終了そしておもちゃを飼い主が管理することです。

五、下位のものは上位のものにおなかを見せる

抱っこや遊びの後のおなかをさすってのクールダウンはさりげなく上下関係を示していることになります。犬の身体を搔くこともここに繋がっているのです。

ここまでを読んで何となく心配になった方

すべての犬がこのような反応を示すわけではありません。生後45～50日で仔犬を母親や兄弟から離し、人間の手で育てる利点は犬社会の中での社会化が起きる前に人間社会での社会化を進め、人に対して寛大で従順な犬にするためです。

こうしちゃダメ、ああしてもダメと心配しないで要するに人間中心の生活を心掛けるということです。

家は厳しいから大丈夫

厳しすぎるのは絶対よくありません。反抗的になったり順位を強く意識して奥さんや子供さんが被害にあうことになります。お父さんの言うことは聞くけどほかの家族では手に負えないでは困ります。

言葉や力で物事を教えることもできますが、リーダー（畏敬の対象者）については犬社会の主要な言語すなわち何げない生活部分での立ち居振る舞いで示す方が、効果的に意識付けられると思います。

犬を室内飼育するブームの中で溺愛に走りがち日本人が最も不得手で、したがって目を向けようとしない項目のような気がします。小型犬の飼い主に特に多く見られる傾向です。

しつこいようですが犬に対し暴力的に威張り散らすのではありません。何げない動作の中で意識的に当然のごとく一貫して示せばよいのです。犬に敬意を示させるほんの小さなきっかけとしてください。

犬は人間のパートナーという考え方があります。全くそのとおりだと思います。ある意味において対等な関係を築き、お互いがお互いを認め合って喜びを分かち合える。そんな思いで犬を飼う人がほとんどではないでしょうか。

木漏れ日の中、恐らく散歩の途中なのだろう、ベンチに腰掛けるふたり。周囲を散策していた愛犬がそれに気付き、ゆっくりと近づき前足に顎を乗せるようにして足元で伏せている。時折ふたりの会話に目配せしながら、話の内容がわかるとでも言うのだろうか緩やかに尾を振っている。遠くから子供の声が聞こえ、見ると元気な犬が子供を引っ張るように走ってくる。伏せたまま愛犬は顔を持ち上げ、耳を立ててその様子を見たあとご主人を振り返る。主人はニコッと微笑みながらも静かに首を横に振ると、愛犬はまた前足に顎を乗せ、自分の若い頃を思い出すように近づいてくる犬と子供を眺めている。

若い頃から描いていた夢の一片ですが今の私ならこのような情景を可能にすることが出来ます。そして、現在の仕事は、『犬を介して人の心と通じる』をモットーにしていますので、多くの方たちと分かち合えたらと思っています。犬をよく知らないけどこれから飼いはじめようとする方、これまで飼ってきたけどうまくいかず悩んでいる方に少しでもそれぞれの目標に近い生活になるようアドバイスができればと考えています。大きなことではありません。具体的には先ほどの夢にあるような情景ですし、愛犬と車で街に出かけてショッピングや公園でのランチを楽しむという他愛のないものです。ただ大事に思っていることは、その様子を他の人たちに特に子供たちが当たり前のように目にする社会づくりに関わられたらなということ

す。

話を戻しましょう。パートナーと言いつつ私は畏敬の念という言葉をごここまで何度か使ってきました。畏敬とは文字通り畏(おそ)れ敬うことです。別の言い方をすれば主人は犬にとっての鎮守の森の神様という意味です。さらに言うなら誠実に生きているなら神様のおかげで平穏な生活が保証されるが、悪い行いをすれば天罰が下るという意味です。

悲しいことに私は無神論者ですが、どのような神や仏に対しても恐れ敬う気持ちを持っています。

さて、現代の都会や街で暮らす人と犬の環境は多くの制約を受けています。散歩中におしっこをさせるなとか、犬お断りの公園とか常識や社会性というのは時代によってこうも変わるものなのかと嘖然とさせられることが少なくありません。

一方では愛犬家のマナーの悪さも目に余るものがあります。未だにウンチを放置したり、明らかに犬を怖がってる人がいるのにリードを長くしたまま歩いたり等々。いずれにせよ愛犬との生活を都会などの地域で楽しく過ごすためには、『制御する!』ということをも身につけなければなりません。そのことが突然の道路への飛び出しを防ぎ、また子供やお年寄りを突き倒したりするのを防ぎ、結果的に愛犬の命を守ることになるのです。畏れは恐怖ではなくうやうやしさを含み畏(かしこ)まることです。叩いたり蹴飛ばしたりして教えることは恐怖を植え付けます。道路に飛び出そうとした犬に「マテ!」と言った場合、主人の言葉に恐怖を感じた犬はそこから逃避しようとして却って危ないことになるでしょうが、畏敬の場合はそこで畏まるでしょう。

河川敷などで誰もいない時を見計らって犬を放したとします。犬は自由に遊び、呼べば戻ってくるあなた自慢の犬です。かけっこをしたりかくれんぼをして楽しんでた時、いつのまにかジョギングをしていた人あるいは別の犬がすぐ近くまで来ていました。すぐにあなたは自分の犬を手元に呼び寄せることができるかということを問うているのです。私の犬は人に飛びついたり他犬と喧嘩しないから大丈夫ということではありません。犬嫌いかもしれない人に恐怖を与えたり、喧嘩好きの相手の犬から事前に愛犬の身を守れるかということです。ご褒美や信頼だけでは突然の誘惑に対処できないし、「なあも、なあも、大丈夫だ。おらが急に飛び出したから悪かったんだ」という田舎のおおらかさは都会で通用しにくくなっているでしょう。畏敬の念で従うべき雰囲気を感じ取らせ、さらに都会でスマートに生活できる犬を育てることで、都会の人のある種張り詰めた心をも柔らかくできればと思います。そのうえでのパートナーが人と犬との関係ではないでしょうか。

2-6 その他

一、恐怖心

ぬいぐるみのように愛らしい犬と遊んでいても人によってはイタズラ心が芽生えてくるときがあるようです。ちょっと驚かせてみたらそのしぐさがとても可愛かったとか、犬にとってはいい迷惑なこともあります。幼児体験とか恐怖体験という言葉が聞かれたことがあると思いますが、その影響は意外と心の中に残り続ける場合があります。

花火やおもちゃのピストルで脅かすなど意図的で執拗な悪戯は避けるようにしましょう。

社会経験の中で最も大切なのは不安や怪訝に感じる物事にひとつずつ慣らしていくことです。

二、移動は抱っこで

この時期トイレの出し入れ、一緒に外出などの時は基本的に抱っこで移動します。

重くて大変になるまで頑張りましょう。理由はいくつか推測されますが経験上扱いやすくなる傾向があるようです。もちろん、これさえやっていたら扱いやすくなるなんてことはありませんが・・・。

第3期 (生後100日から120日、2回目のワクチン接種時)

3-1 仔犬の成長過程と原則

一、人で言えば小学校中学年に入ります。腫れ物を触るように慎重になりすぎないで、それぞれの家族としての必要なマナーを大胆に教える時期です。

二、人の食べているものをついつい与えたりしていませんか？

盗み食いがしやすい状況を作ってはいませんか？

必ず守って欲しいことのひとつです。ご注意を！

三、家族の外出と帰宅時の注意

外出の時、一緒に連れて行ってとでも言うかのようにまとわりついたり、帰宅時に家族の誰よりも先にお迎えにくる姿は、愛しく可愛いものです。でも近い将来それが飛びつきなどの問題行動となる場合がありますので以下のことに注意しましょう。

① 出掛けるときは知らん顔してさりげなく。(犬に対しての「行ってくるからね」の挨拶厳禁。成犬になって我が家の犬は心配ないと分ったら、大いに挨拶してください。以下同じ)

② 帰宅時の挨拶を決して犬にしない(喜んで飛びついて来ても無視する。大きくなってからは無視もできない飛びつきになってしまいます。服を着替えるなり、テレビ・新聞を見るなどしながら犬が落ち着いたら言葉をかけて遊んでもかまいません。)

③ 現実はその簡単にはいかないことを実感しておられるでしょう。

ただ、少なくとも「ただいまー！おー！よしよしよし！出迎えてくれるのはお前だけだ。」と人も一緒になって場を盛り上げることだけは避けたほうがよいことを忠告しておきます。

3-2 食事

フードの量については個体に合わせて調整します。

一、食事の回数は3回にします。

二、体型に個体差がでてきますが、近所の人に痩せすぎか太りすぎかちょうどよいか聞くようにしましょう。(いつも1緒にいる家族では判りません)

三、与える時のしつけはこれまで通りの方法を続けます。

四、掃除機や洗濯機など室内にあるものの音をこわがる場合は、スイッチを入れた状態で距離(多少不安を示すが怖がるほどではない距離)をおいて食事を与えます。時間をかけて(2～3週間)距離を縮めるようにして慣らします。

自動車に不安を示す場合は

① エンジンを止めた状態で2～3日車内で食事をさせる。

②エンジンをかけた状態で慣れるまで時々食事を与える。

なお、車酔いがあって不安を示す場合はその項をご覧ください。

3-3 トイレのしつけ

まだ数回の失敗があってもおかしくはありません。もう一息ですので頑張りましょう。

一、どのようなときに失敗するか思い出してください。

①時間的に無理があったかも知れない

②サインを出していたのに見落としたかも知れない

③寝起きや遊んだ後に出すのを忘れてしまった

これらについては犬を叱るのは間違いのように思うかも知れませんが、叱ってください。皆さんは犬に対して独裁者であってよいのです。

ただし傲慢な独裁者では困りますので、頭の中では『私のミスだった。これから気をつけよう』と反省してください。トイレのしつけのポイントは成功を積み重ね、喜びを表現することだったのを再確認しましょう。

二、わざと失敗しているように思える

人の注目を集めようとするこのような努力？をすることがあります。

既に外に対しての好奇心が強くなっています。安全な場所で十分な運動をすることが必要です。

今ひとつの注意事項があります。食事や運動で満たすだけではうまくいきません。『1人の時間を過ごさなければならぬときもある』という経験を日頃から持たせておくことがとても大切なのです。ある程度欲求を満たした後は室内でも繋いでおくとか、ケージに入れてドアを閉めておくなどを日頃から当たり前のよう経験させておきます。もともとの犬の性格や体質が原因ですが、溺愛や反対に厳しすぎるものがこれを誘発することもあります。

三、その他

①病気の可能性もあります。別紙『よくある病気と事故』の膀胱炎の項をご覧ください。

②フードに入れる水分量は適正ですか。つつい牛乳などたくさん飲ませていませんか。

③帰宅時や来客に喜んで行ったときに漏らすなら、少々時間がかかります。気の弱さ・優しさあるいはリーダー志向の強さなどが絡み、強い服従性と押さえ切れない興奮が事を複雑にしています。3-1の三を実行しながらしばらく犬を構わないで、リーダー的な対応も控えるようにします。

これらをチェックしてなお思い当たらないときは獣医に相談してください。

3-4 かじる

基本的には前回までの方法をもう1度チェックしましょう。犬との関係が最初のころとは違ってきていると思いますのでこれまでのところを読み返してください。

乳歯が抜け始めてきて出血もあるかと思いますが特に治療などの必要はありません。

一、かなりひどい目にあっている方（おそらくほとんどの方）

①これまで『まだ、仔犬だから』と高をくくっていませんか？

犬の成長は速く、行動は本能によって支配されこれまでに学習した項目がそれに加算されます。愛情や

欲求を満たすだけでなく制御しリーダーシップをとることは自然界の中でもとても大切なことです。

確認しましょう。

a 食事のときなど『スワレ』『マテ』ができていますか

b 人の食べ物を与えてはいませんか（その気持ちが諸悪の根源になりかねません）

c ソファに上がるのを許していませんか。この程度の制御（してはいけないことを叱ってでも教える）が犬に対して出来ない、これから益々取り扱いづらくなってしまいます。

d 社会経験（外での散歩や運動）のための時間が取れていますか

e 室内で1人になる時間をさりげなくとっていますか

f 2—5の帝王教育を読み直してみましょう。

g 仔犬の身体を搔いていますか。とにかくおせっかいなほどに搔いてください。

②一生懸命になりすぎていませんか？

かじるのは仔犬の本能でした。完璧を求めようとすると叱ってばかりになりがちです。その結果犬の防御本能を表面化させて悪循環が始まってしまいます。

別方向からのアプローチだってあります。例えば仔犬が『もう疲れてしまったよ』と感じるほど遊べば、すぐごととケージに入っていくかも知れません。

ひょっとしたら犬自身に問題があるかも知れません。犬の血統によっては滅多なことではめげない兄弟姉妹が揃うのもよくあることです。他の兄弟犬の飼い主さんと連絡をとってみるのもいいでしょう。

かじりの問題はもう少しで解決されることですが、基本は与えるべきものを与え、制御すべきものは毅然とした態度で制御するという事です。そこには裏打ちされた信頼感と愛情が存在するのは勿論のことです。

二、少しずつ改善されていると感じる方

かじる対象が他の良からぬものに向けられないか注意してください。おもちゃであれば問題ありませんが、靴や靴下など家族の気を引くものにならないようにしましょう。以前のおもちゃに飽きてきたかも知れません。犬用のガムや加工された骨などお気に入りを見つけて与えます。また、散歩のときリードを軽くくわえる程度なら構いませんが、咬んでしまうようならビターアップルなどたっぷり塗っておくか、これが電気コードならどうするかという思いでやめさせてください

3—5 散歩と遊び

一、散歩

① 2回目のワクチン接種後2週間で抗体ができるといわれています。病気から身を守るためにはあまり外に出さない方がよかったです。犬の社会化のためには重要な時期でしたので、注意しながら散歩をしていました。これからはどんどん外へ出てください。

② 十分な運動で満足した犬は、その帰り道にあまりよそ見をせず主人を引っ張ることもなくまた室内でもいたずらやかじりが減少します。できれば1日2回以上それぞれ30分から時間の許す限り連れ出しましょう。もちろん犬の状態をみて臨機応変の対応が必要です。

③ 散歩には犬のための散歩と買い物など人の用事に同行させる散歩があります。特に用事に同行させる時は犬の言いなりにならないようにしましょう。

二、犬のための散歩

☆町内をひと回りするいくつかのコースを歩くことも大切ですが、これは普段みなさんがやってるので、ここでは省略します。

生後4ヶ月になったら河川敷や原っぱなど目的地を設定します。できるだけ歩いて行けるところがいいでしょう。

☆目的地では犬を放しますので、人や他犬がいない時間帯、また生ゴミなどが散乱していない特定の場所を見つけておきます。(放した状態では仮に事故があっても皆さんが加入している保険の対象外となる場合がありますのでご注意を！)

散歩は皆さんと愛犬にとってとても楽しい時間ですが、その目的は運動と社会経験にあります。ここでよく勘違いがありますので確認しておきましょう。

☆自宅から目的地までは運動よりも社会経験のための歩行です。

a. 引っ張る・匂いとりはさせないつもりいてください。

b. 怖がるものを見つけたときは、だっこして慣れるまで時間をかけて見せるなり近づくなり励ますなどします。イエストレーニングも効果的です。

c. 階段などを怖がる時はだっこして渡ります。

☆目的地についたら一緒になって存分遊んでください。そして以下のことを注意し、あるいは心掛けましょう。

a. 周囲の状況を見て放せる場合は放します。(禁止場所を除く)

はじめのうちは面倒でも5~10メートルくらいの細い紐をつけておいたほうが安心かもしれません。拾い食いをどうしてもやめない犬や、放した後いつまでも主人を無視する犬はそうしてください。

b. 突然遠くへ走り出したように感じますが、犬も不安ですので主人が見える範囲にいるはずです。よく観察して犬がとる次の行動を予測するトレーニングを心掛けておきます。例えば木の棒を見つけたから啜るぞとか、そろそろ振り返るぞとかこの奇声を発したら振り向くぞとかで、これは将来役に立ちます。

c. 犬を捕まえようとししないで一緒に遊びながら人と犬の距離を1~3メートルに保てるように犬を慣らします(主人が近づいた→そら逃げろ!ではなく、主人が近づいた→一緒に遊ぼう、の経験を積み重ねます)遊ぶ道具として軍手やボールを2個用意します。詳しい遊び方は様々な方法があるので経験の中から見つけるか、試行錯誤してください。一旦軍手を空中に放り投げてキャッチするのを犬に見せ、すかさずしゃがんで背中を向け、おもしろそうに演じると犬が近寄ってきたりします。

d. もし簡単に犬を触れるチャンスがあれば『おいで』と言ってリードを付け、少し歩いてまた犬を放します。『おいで』→繋がれるからイヤだ!ではなく、『おいで』→次はどこでなにをするの?あるいはもう疲れたから帰ろう。

これが何度かできるようになったら、リードをつけた後「スワレ」「マテ」「おいで」と命令し、できたらよく誉めてまた放してください。(自宅でできない犬には無理ですから、はじめはよく遊んだ後室内で練習し次に庭先などでもできるようにします。)

e. 何か口にくわえても慌てず(慌てて捕まえようとする犬は逃げるか飲み込むことを常習にしてしまいます)、遊ぶふりをして近付いて取り出すか、少し大きめの木の枝などを投げて拾わせるなどして気分を転換します。

口から物を取り出すときは余程従順な犬でない限り言い聞かせて出させてはいけません。少しでもそのよ

うな時間をかけると、反抗的な気持ちを呼び起こす原因となり、唸り・噛みつきを助長します。捕まえた後は毅然として「ノー」と言いながら、右利きの方は左手で上顎を上からしっかり押さえ、親指とその他の指を上唇ごとねじ込むようにして犬の口をあけ、右手で取り出します。

f. 犬と反対方向へ逃げて、時には隠れて犬に捜させます。見つかったときは大袈裟に遊びます。見つけた時に「どうして隠れたの！」とでも言うかのように吠えて怒り出す犬もいますが、その場合は毅然と叱ってください。喉の横あたりの皮を両手でつかみ「ワン！ワン！ワン！ノー！」犬にわかりやすく短い単語で叱ります。

g. 皆さんに集中しているときに『おいで』といって、来たらリードをつけて少し遊びまた放します。そして時々dの訓練を行います。

イエストレーニングを併用すればさらに容易に対応できるでしょう。

☆目的地から自宅までは上手に歩かせるチャンスです。

a. 犬は満足し疲れていますからコントロールされることを容易に受け入れることができます。

b. よそ見や匂いとりをしようとしたら『まっすぐ』と言って軽いショックを与え、やめるまであるいは諦めるまで繰り返す、その状態が少しでもできたら『そう』と低い声で肯定します。「よしよし、よしよし」という言い方は犬の興奮を高める傾向があります。

c. 同様に引っ張りそうになったら『ゆっくり』と言ってコントロールを繰り返してきたら同様に『そう』と肯定します。

d. 来るときに怖がったものがあれば、もう1度そこを通過して明るい気分を演出し、また慣らしておきます。

e. もし手短かな買い物ができれば、犬が疲れているうちに店の外に繋ぎ、手早くすませて戻って来ます。その際『待っててよ』とか『おりこうさんだったね〜』などの言葉は不要です。黙って行って素知らぬ顔で戻って来ます。

戻ってきた時、吠えたり飛びついたりしますが、可能な方は毅然とした態度でやめさせてください。初めは繋いだ後店に入り、買い物もせずに出てくることをお勧めします。また、牛乳を買ってきて、その場で少し飲ませる方法もあります。

☆散歩に出掛ける前に

①トイレを済ませます。ウンチをする時間帯なら辛抱強くさせます。

散歩に行けると思い犬はなかなかしようとはしません。ウンチをしたら出掛けられるという結び付きができれば最高です。予備の便袋を必ず持ち歩いてください。この便袋というのはコンビニでもらえる普通の袋で、それに手を入れウンチを掴んだ後ひっくり返せば手を汚さずに処理ができます。

②犬の気を引くボールなどのおもちゃか『イエストレーニング』で用いるフードを少し用意しておくと、『おいで』の練習に役立ちます。

三、買い物など人の用事に同行させる散歩

社会経験を積ませるには良い機会ですが、前掲のeにある手短かな買い物を何度か繰り返した後から始めるようにします。目的は店などに主人が入っても必ず戻ってくることを経験させ、これも生活の一部と認識させることです。ですから不安要因を少しでも取り除くために

①散歩帰りの満足し疲れたときを選ぶ

- ②『待っててね』など不安を予兆させる言葉をかけない
- ③必ず戻るといふ結果を積み重ねているのです。

3-6 その他

一、車酔い

自動車で外出するとよだれを垂らしたり時には吐いたりすることがあります。

その原因は

- ①体調が悪い
 - ②空腹時や食後すぐに車に乗せたり運転が乱暴だった
 - ③遺伝的に車酔いしやすい
- などがあります。

何度か車酔いをする犬はその原因と結果を結び付けて、車に乗るのを嫌がるようになります。それとは逆に快適に車に乗ることを経験した犬は、いつもと違うところへ行ける喜びで楽しみになるものです。

[対応]

①連続して車酔いがあれば市販の子供用の酔い止めを服用させてください。(可能であれば獣医に相談してください)

用法と用量は説明書をよく読み仔犬の体重に合わせてるようにします。この時期であれば2歳以下の子供の量でいいでしょう。(薬の飲ませ方参照)

- ②3-2 食事の項で述べた手順で車に慣れさせます。
 - ③外出に合わせ食事の時間を調整し、食後30分以上経つようにします。
- また、乱暴な運転は避け、初めのうちは短い時間で練習してください。

二、薬の飲ませ方

①錠剤・カプセルの場合はパンやチーズなど好んで食べるものにくるみフードと共に食事のときに与えます。

②液剤や散剤の場合は食事のときに混ぜます。もしそこだけ残すようでしたら①の方法を使います。

③げんのうしょうこ等漢方を煮出して使うときは、冷ましてから食パンなどに浸して与えます。

錠剤・カプセルの時は確実に飲み込んだかの確認をします。薬だけ吐き出してしまうことがよくあるからです。

三、つめきり

犬の爪はほとんどの場合前肢に5本後肢に4本ずつあります。

この爪については時々切ることが必要です。(不安な方は動物病院やペットショップで切ってもらってください。)

①4カ月頃までは人間用の大きめの爪きりを使います。以降は犬専用の爪きりがあります。

②爪を透かして見ると、中心部に赤い組織があります。そこを切ると出血してしまいますので、その先から1ミリ以上残した部分を切ります。難しい時は先端の尖った所だけでも切るとよいでしょう。もし出

血したらティッシュペーパーで1分程強く押さえて様子を見ます。

③仔犬の内は2～3週間に1度、成長するにつれその間隔は延びます

④仔犬が膝のうえでウトウトしているときか寝ているときが切りやすいでしょう。

3) シャワー

これまではできるだけ全身を洗わないで、蒸しタオルなどで拭くようにしていましたが、ワクチンをしてから1週間以上たてばシャワーを使っても構いません。

①シャワーの温度は季節によっても変わりますが、人が使うときよりはぬるめにします。途中からハーハー言うようなら熱すぎると考えてください。

②できるだけ犬用のシャンプーとリンスを使います。

③1番のポイントはすすぎを十分にするということです。

④バスタオルなどでよく乾かします。この時とても興奮するのが一般的です。

⑤耳の中の水分を綿花でかるくふき取ります。

⑥怖がらないようでしたらドライヤーか布団乾燥機で乾かしても構いません。

⑦夏の暑い日は外で水で洗ってもいいでしょう。

第4期 (生後約5～6カ月)

4-1 仔犬の成長過程

人で言えば小学校高学年に入るかという年頃です。まだまだこれから大きく変化していきますので、うまくいってない方も余り気に病むことなく犬の良い所に目を向けましょう。

ようやくかじりの問題も解決しつつあると思います。(4-4参照)

一息つけるかと思うと次の問題が出てきているのではないのでしょうか？

- ・散歩のときの引っ張り
- ・人への飛びつき
- ・室内でのいたずら

この3つが特徴的に現れる時期です。

そして実はこれらの問題を少しでも押さえる為に今までの注意がなされてきたのです。

今後の注意は主に歩行が中心になります。室内での問題についてはいくつか項目で説明しますが、どうしても個体差が出てきますので自己解決が必要になってきます。専門家のアドバイスを受ける時期でもあります。

4-2 食事

別紙「給餌のめやす」では生後6ヶ月を過ぎたら回数が2～3回となっていますが、体重が少な目の犬やフードを増やすと便が緩くなってしまう場合あるいは回数を減らすのが忍びない方はしばらく3回で続けてください。生後八ヶ月から10ヶ月頃に2回にしても構いません。

注意事項

① 太り過ぎを指摘される場合は、フードよりも間食に問題があると考えられます。

レトリバーは食欲旺盛だけでなく、自分で適正な量を判断し調整することができない種類ですので、皆さんがしっかり管理してください。

② 食事を2回にすると、早朝に嘔吐することがよくあります。若い犬は消化活動も盛んでおなかが空っぽになった朝食前に、黄色い胃液を吐くのです。

対策としては、夕食を少し遅らせて次の朝食までの時間を12時間以内に抑えることです。もし朝食と夕食の時間が開き過ぎるようなら、太らない程度に間食を与えてください。(吐かない犬には与える必要はありません)

③ 食事のときのしつけは継続して、食器を両手でしっかり押さえることは時々でも行ってください。

4-3 トイレ

① 草の上だけでなく土や石の上、時にはアスファルトでもできれば将来役立ちます。

② 排便場所にあまり神経質でないほうがよいのです。外出などの機会があればそこでもさせてみてください。

③ 仔犬のときのようにトイレタイムの雰囲気作りをする必要はありませんが、言葉がけは続けるようにしましょう。

トイレについての項はこれで終わりますが、「トイレのしつけ」とは外の決められた場所あるいは指示された場所で排尿便がスムーズにでき、室内を汚すことなく、また予定時間外にもよおした際には何らかの方法で飼い主に知らせることができるようにすることでした。このことを今後も忘れないで必要な対応をとってください。

4-4 かじる

そろそろこの項目もピークを過ぎ、今では家族の中の特定な人（主に奥さん）を対象にかじるようになっていないでしょうか。

もっとも甘えたい人に赤ちゃん返りの行動を示すようにも見えますが、気をつけてください。

その行動に変化が出る可能性があります。だんだんと支配欲が出てくるとかじりの対象としていた人にマウント（交尾行動のような動作）を始めることがあります。

子供のころにもそのような行動を見せていたかも知れませんが、今度は明白な意志を含んだものへ変化していくことが考えられ、場合によっては犬が凶暴になることもあります。そうなると家族の中にケガ人がでることもあるのです。

明確な態度でやめさせなければなりません。

その芽を摘むうえからも、かじることはそろそろきっぱりやめさせましょう。

この時期までくると止めさせるのは方法ではなく皆さんの確固たる意志と犬に示す毅然とした態度です。十分な運動とその中であるいは食事のときに教えた基本の訓練を当然のごとく要求し、そして大人に接するような自覚が必要です。

4-5 リード歩行

確認事項→犬を飼うには、しつけやマナーは飼い主の責任でしっかり行われるべきです。しかし、それは性急に行うものではなく1つ1つの課題を適切な時期に適切な方法で継続して初めて効果的に無理なく教えられるものです。1歳までに何もかも教わった犬を育てるのは無謀といえます。ですからそれぞれどこかに問題があるものです。最初の1年で教えるには難しいと思われることに時間を費やし犬をうんざりさせたり、皆さんに専門家の対応を要求するのは本意ではありませんので、例えば散歩のときには引っ張り防止の首輪（スパイクの付いたものは絶対にダメです）を使用するのもよいでしょう。人は引っ張られるから散歩が億劫になり、犬は散歩に出ても叱られてばかりか或いはいい気になって主人を引きずり回すかで、冷静な社会経験などとてもできないことを実感しておられるでしょう。もちろん、犬に引っ張らずに横について歩くことを教えれば良いのですが、そのためには室内でのしつけがうまくできず犬に甘く見られている方はまずそちらの取り組みから始め、さらに1週間の講習が必要となります。最低限「スワレ」「マテ」「おいで（コイ）」を散歩中にできることが条件です。

これらのことをすべての方に解説するには無理がありますので、犬に負担の少ない道具を使って散歩を容易にし社会経験を優先する方法もあることを伝えておきます。

ただ、皆さんと犬の関係がとてもうまくいって、引っ張らずに歩くことを教えることができる場合には迷わず普通の首輪かチョークチェーンにリードを付けての歩行を行ってください。リード歩行が上手にな

るということは、単にそれにとどまらず制御し制御される人と犬の関係を毎回積み上げていることになるからです。

参考のために以下をお読みください。

一、犬の位置

一般的に犬は人の左側に立って歩かせるのですが、犬の頭を解発する手段の1つとして歩行の際は建物側に犬を立たせることをお勧めします。右側通行のときは右手に、左側通行のときは左手になることを考えさせます。

二、リードの持ち方

リードは短く持ちます。もし、市販されてるような長いリードをつけて犬が約1、5メートル先を歩いていたらコントロールは不能です。ただつなぎ止めることができるだけで、スピードコントロールや匂い取り・人への飛びつき・拾い食いを防止することはできないと考えてください。

リードを長くするときは排便時か係留時又は皆さんがコントロール外にあることを認めているときです。基本姿勢は左側に犬がいるときリードの最後の部分を（できれば輪にして）右手で持ち、首輪に近い方を左手で持ちます。左腕はリラックスした状態で犬は体半分が前に出る位置に立たせます。目標は言葉と左手首のスナップで犬をコントロールできるようになることです。十分に運動した帰り道に試してみることをお勧めします。

本書3-5の二)の最後のb・cを参考にしてください。

犬が強引な動きをするときは、次回からその動きを事前に予想し、左手を離し右手に持っている輪を両手で握り対応します。四のショックの仕方参照

三、引っ張りの矯正

①広い室内か庭先もしくは十分運動して落ち着きがあるときに始めます。

②簡単な服従（基礎）訓練をして出来たときは興奮させない程度にほめてください。

③リードを付けた2)の基本姿勢で歩き始めます。すぐ犬が前に出ようとしますので

すかさず「ヒール」（横につきなさいの意）と命令し手首でショックを与え、犬の進路をふさぐ方向（左手に犬がいれば左）に曲がります。根気よく繰り返します。もちろん少しでも横について歩けたときは、興奮させない程度に胸をたたいてほめます。

④ヒールの命令がスワレのように当たり前の命令として犬の頭にインプットされるまで長い期間独立した日課として繰り返します。イエストレーニングを併用すれば効果的です。

⑤①のように出来る状況の中から始め、次第に気が散るところでもできるようチャレンジします。出来ない中でヒール・ヒールと繰り返さない方がいいでしょう。ただし、出来るはずのところでは既にヒールを理解しているにもかかわらず、命令に従わないときには厳しく対応します。この場合も出来た結果に対し手のひらを返したようにほめてください。訓練は最後にほめること（皆さんが喜ぶ姿を見せること）で終わるようにします。

四、ショックの仕方

ショックと引っ張り返すことは全く違います。

ショックは痛め付けることが目的ではなく、ある動作を止めさせることと主人の存在を一時的に忘れた犬を我に返し次の指示を聞く耳を持たせるためのものです。

一方、引っ張り返すことは何かしら訓練に役立ちそうですが、実は百害あって一利なしです。皆さん

が引っ張り返すのは犬が引っ張るからで、同じことをされた犬はやはり引っ張り返すのが当然の反応になります。お互いに反作用的な行動を延々と繰り返すことになってしまうのです。

①ショックの強さは犬が我に返る強さで状況によりまちまちです。イエストレーニングの最大の目的は主人の小さな声にも耳を傾けることでしたから目的は同じです。

②引っ張りとショックの違いは、持続的か瞬発的かの差です。持続的なら抵抗しますが瞬発的ならハッとして我に返ります。スナップを効かせるやり方ですが緩いショックは手首で、強いショックは手首と肘でそれぞれ使い分けます。

ただし、自分勝手に引っ張る犬に対して、ショックだけで対応しようと考えない方がよいでしょう。例えば次のような方法をまず試みてください。

瞬間的に奇声を発して犬が注目したら、語りかけ、スキンシップを取り、その犬が今出来そうな命令を出して、その結果に対して大喜びし褒めてやる。そしてすかさず歩き始めて犬とコミュニケーションをとるための精一杯の演技をします。そのうち演技ではなくお互い本当に楽しい思いが込み上げてくれば大成功です。

五、散歩と匂いとり

散歩は開放的な中で行われる主人と犬とのコミュニケーションです。引っ張らない訓練はその土台を築いているだけで目的ではないのです。ひょっとしたら引っ張り防止の首輪を使えばコミュニケーションを取ることに時間が使え、いつの間にかリードでも引かない犬ができあがるかも知れません。それほどお互いを意識し、それを言葉や態度に表わすことは大切だと思います。歩行中に犬が皆さんを意識したら、とにかく笑顔で言葉をかけ時にはスキンシップをとるよう心掛けてください。

ところで、実際の散歩では匂い取りや拾い食いが多くて、とてもコミュニケーションどころではないという方もおられるでしょう。引っ張りと共にこれらはコントロールされなければなりません。

①自分が犬になったつもりで前方（4～20メートル先）の興味あるものを先に見つける習慣をつけておきます。（紙くず・草むら・人・動物などなど）

②犬の視線をよく観察し紙くずなど見つけた途端、犬の名前を呼んで「まっすぐ」と注意を促し、必要なら軽いショックで我に返します。

③それでも犬が紙くずなどに一歩でも踏み出しそうになったときか、鼻っ面がそちらを向いたときは強いショックで止めさせます。

犬が獲物を口にくわえたらあなたの負け、直前に阻止できたらあなたの勝ちとなります。成功の秘訣は犬より先に発見することです。突然犬が引っ張ってしまうことはありません。必ずその前にサインを出しています。よく観察してください。効果的なやり方は後戻りして同じ場所を2回3回と歩き、犬が我慢してでも無事通り過ぎることができるようになるまで繰り返すことです。その後も話しかけるなどの刺激を与えて下さい。

六、主人を意識させる方法

ただ黙って歩くことは犬に本能的な行動を促すことになり、いつまで経っても散歩に向上は見られません。以下の方法を試してください。

①交差点では信号に関係なく必ず止まる

②わざと靴紐を締め直すふりをして、主人の作業が終わるのを待たせる

③犬に背中を向けてしゃがみ、何かしているふりをする

④家を出てすぐに忘れ物を取りに帰るふりをして、人だけ玄関に入りすぐに出てくる

- ⑤ヒールの練習でしたように犬の進路をふさぐ方向に急に曲がり、その際膝が犬の顔に当たるようにする
(謝る必要はなく犬を無視する)
- ⑥「痛テテテ！」と言って止まり、すねや足首などをさする
- ⑦段差や石ころにつまずいたふりをしてバランスを崩し、犬の体にも何らかのショックを与え「ごめんごめん」と、あまり感情を入れず謝る
- ⑧歩きながら犬側の手で背中から尾の付け根までをもじもじよする
- ⑨舌打ち・口笛・奇声等を発し、犬が振り向いたら喜び、両手で犬の耳を強く搔く
- ⑩犬の名前を入れた替え歌を口ずさむ

お解りですか？

①～④は犬にとって格別であるべき散歩中に、主人がごくありふれた日常的行動をすることで、犬が落ち着いて待つ経験を積み上げるのが目的です。

家の中で犬は家族の動きをよく観察しています。家族の日常的行動のほとんどは自分に関係のないもので、つきまともも無駄であることをすでに経験的に知っていて落ち着いて眺めていることが多いのです。これを利用することでショック以上の冷静さを引き出すこともできます。日常行動のように振る舞い、犬に余計な声をかけたり目を見たりせず、つらっと「ちょっとマッテ」の一声で充分です。

⑤～⑦は犬に一瞬「何事だ！」と思わせ、主人に注目させるのが目的です。注意力が散漫になっているときや浮ついた時に使います。意図的にやったのではないと思わせるために犬のことは無視したふりをします。

⑧～⑩は犬にニンマリとした気持ちを抱かせるのが目的です。「うちのご主人はホントに子供なんだから」と思わせ？満更でもない気持ちを抱かせたら上出来です。良い状態で歩いているときに試してください。

4-6 外出とハウス

もう黙っていてもケージに入って寝る犬が多いと思います(ケージが居間にある場合)

でも、入れたいときに入らず、入っても鳴いたり吠えることはありませんか？

1-5で説明しただけですのでその後の対応は皆さんそれぞれでしょう。

問題を抱えている方は以下をお読みください。

一、ハウスの命令でケージに入らない

- ①ケージは罰として閉じ込められるところではなく、安全でくつろげる空間であること
- ②ケージはご飯を食べる時に入って待つ場所
- ③ ケージに入ると御褒美をもらったことがある(イエストレーニングを併用)
- ④車に積んだケージに入って楽しい場所に行ったことがある
- ⑤ ケージには毎日入っている

これらのことを再度実行してください。「ハウス」という命令も覚えるくらい使います。

二、ケージに入れた後鳴いたり吠えたりする

方法はいくつかありますので犬に合うやり方を選んでください。

①ケージに入れた後、時々外出着(買い物や散歩に行くときの服など)を着て家事でも始めてください。その際犬が喜んで吠えても声を掛けないし目も見ないで例えば掃除機をかけるか洗濯などをします。ただじっとしているだけでは動き始めたときまた吠えるかも知れないので動くほうがいいでしょう。玄関に通

じるドアへも出入りして、たまには外へも出てみます。ラジオもかけて普段の生活を演出しておきます。外に出るときはカギを掛ける音も聞かせておいた方がいいでしょう。すぐに戻ってきて家事を続けてください。これを普段から続け、吠えなくなったら同じ素振りでも外出してください。

外出のときには3-1の3)に従いあいさつや言い聞かせはしてはいけません。

②入れてすぐ吠える犬には厳しい対応をしますので真剣に行ってください。

ケージのドアの取っ手の部分を持ち上げます。犬は鼻をねじ込んで自分でこじ開けようとしますので瞬間的にドアを開け閉めし、ドアが思いっきり犬の鼻っ面に当たるように閉め、これを繰り返します。決して犬が外に出ることのないように細心の注意が必要です。皆さんの気迫を示して「静かに！」と命令します。3回ほど繰り返すとこじ開けることはしなくなります。少し離れてまた吠えるようなら同じことを繰り返します。

②そんな対応はとて出来ないという方や鳴く犬には別の方法をとります。

加工された骨や筒状になったものあるいは犬用のコングの中に、練ったチーズか甘さのないピーナツバターを塗り込みます。犬は中のものをなめるのに夢中になって2~30分は静かになるでしょう。主人の外出→ハウス→チーズというパターンですがすべての犬にうまく行くとは限りません。

4-7 吠える

皆さんの犬たちにも当然のことながら吠える機能が備わっています。しかし、ここでいう吠えとは要求や寂しさあるいは喜びの興奮によるものではなく警戒による吠えが重視されます。

そしてそれは遺伝による影響が大きく関わっていますので、皆さんの努力だけではどうしようもないところがあります。訓練により警戒の吠えをある程度抑えることはできますが、これについてはいずれ必ずといっていいほどぶり返してしまうでしょう。ただ、吠える犬のすべてが矯正不可能なわけではありませんので、ここではその対処法について説明します。

一、散歩中に不審な人や物を見て吠える

犬の視力はヒトよりも劣っています。社会経験が少なく気の弱い犬は不審なものに対し、声を出すことがあります。

対処法：明るい雰囲気醸し出し、笑いながら犬の不安を取り除く演技をします。人であればその方に撫でてもらったり話し掛けてもらいます。そして、犬が不審に思った理由を考えてみます。例えばサングラスをしていたとか、松葉杖をついていたとか、あるいは夕暮れ時であったとか……。今後それらに慣らせばいいわけです。

ごみ袋や人形のようなものであれば、皆さんがそれに近づいて触り「なんでもないよ」と安心させます。そして、そのものに触れる状態でイエストレーニングを行います。

二、外に繋いだ時に吠える

これについてはコンビニでの出入りと、牛乳を買って少し与えるとか袋を見せて「これ買ってきたよ。あとでね」とか言いながら、コンビニから出てくる時間を徐々に長くします。ただ、そのような犬の場合、甘えん坊で利己的な面がありますので「ダメはダメ」という接し方を日頃から心がけてください。この他にも自宅の玄関先に繋ぎ、ガーデニングや日曜大工でもしてください。動き回ると時間を費やすことが大事です。

三、呼び鈴で吠える

これが問題です。家族や来客を大喜びで吠えて迎えるだけなら心配ないのですが、「お前は何者だ！それ

以上近づくな！」と言わんばかりに吠え立てたり、唸りを伴ったり、あるいは反射的に吠えるのが常習化している場合に困ることになります。

そしてこの吠えは生後6ヶ月頃から顕著になりますので、「これっ！吠えちゃだめ」と制御し、それでも何度か吠えるようなら次の方法を試してください。

対処法：散歩による社会経験を積み重ね、怖がるものを減少させます。

次に食事の都度、呼び鈴を鳴らしてから与えるようにします。さらに、家族の協力を得て呼鈴とイエストレーニングを結び付けてください。仔犬選びの時に親がどの程度吠えていたかを思い出し、妥協すべきところを見つけることも必要です。

4-8 その他

一、グルーミング

この問題で相談を受けることはあまりありませんが、体のどの部分を人が触ってもおとなしく受け入れることができるように慣れさせます。また、体に異状がないかチェックすることもお忘れなく。

手入れは初め毛並みに沿ってブラシをかけますが、犬が慣れてきたら逆毛にかけたほうがよく取れますので試してください。ブラシに種類がある時は堅いものから始め、最後はブタ毛ブラシのような柔らかなもので終わるようにします。

力の入れ具合は犬の反応を見れば次第にわかるようになります。日向ぼっこをする気分心地よくなるような演出をしてください。

二、歯のチェック

口を開けて犬歯（牙）を確認してください。乳歯と永久歯が前後に重なるように生えていたら記録しておきましょう。心配はありません。5-3の四）参照

三、飲み込む

これからはいたずらが多くなり、叱るとすぐに飲み込んでしまうことがあります。追いかけて捕まえようとせず、イエストレーニングのフードをソーセージにするとか、あるいは思いっきり怒鳴るなどして出させてください。

ボール・靴下・ストッキング・竹串・釣り針・電池・とうきびの芯・かみ砕いたプラスチック製品 etc.

石ころやボタン程度であればウンチに出てくるでしょうが、そうはいかないものを飲み込む傾向が強くなります。今一度室内の整理整頓を心掛けるのと、これまで届かなかったところ（例えばテーブル上の食べ物など）にも注意をします。

「よくある病気と事故」の項も参照してください。

第5期 (生後7カ月以上)

5-1 犬の成長過程

まもなく中学校に入学という成長段階です。

これから犬たちはどんどん変化していきます。言葉の理解力や人を観察しての予想力も高まり先を読まれて驚かされることがしばしばです。

自慢したくなるようなお利口さんぶりを発揮するかと思えば、手をつけられないような動きをすることもあります。どちらかと言えば家ではお利口さんだけ外に出たり人に声をかけられたりすると興奮が強すぎる傾向があるようです。これは犬種の特性もありますが、コントロールされた中で十分な運動と人の集まる場所での経験が不足しているためです。特に散歩コースや時間帯が画一的になっていないか見直した方がよいでしょう。最初は通行人が声をかけたり触ったりせず、しかもたくさんの人がいる繁華街だとか通勤時間帯の駅の周辺なんかから始めるといいかも知れません。自宅や静かな場所で満足できるコントロールができれば、このように誘惑の強い状況の中でもそうなるよう経験を積み重ねる時期に来ています。これまでもやったように「さあ、これから繁華街にでかけるぞ!」と、意気込まないで何げない生活の一部になるように、気負わず、できるコントロールを要所要所で繰り返して数と時間をかけます。まあこの程度ならいいかと妥協せず、皆さんが求める犬との生活を追及しましょう。

5-2 食事

ドッグフードが成犬用に変わります。フードの切り替え時期にこだわることはありません。生後7ヶ月頃から10ヶ月位を目安にしているだけです。回数も頃合を見て2回として下さい。

フードの切り替え方は「給餌のめやす」をご覧ください。

一、犬用のガム

食事の回数を減らすと、ついついこのようなものを与えてみたくなります。

ガムの効用は歯垢の除去とストレスの解消です。一般に退屈してなくストレスもたまっていない犬はガムを与えても何日も残ったままです。けれどもこの時期になると犬を十分満足させるだけの運動ができないこともあり、ガムは役に立ちます。

もし喜んで食べるようなら週に1本くらいを与えてみましょう。

二、盗み食い

人の食べ物を与えることがあっては決していけません、いつのまにか盗み食いされたのを放置することもいけません。テーブル上に鼻を近づけるのを許さないでください。

テーブルの端に食パンをさりげなく置きます。すぐに犬が取ってしまうという予想と間違っても飲み込ませないという心構えをしっかりとしてから始めてください。犬の鼻が伸びてきたら、テーブルを思いっきりバシッと叩いて、犬に驚きとたじろぎの時間を与え「ダメだよ!」と1喝します。3回繰り返して終わりにします。

「自分だったら結局取られてしまう」と思う方は、決して真似しないで下さい。そういう方は普段から取られないようにきちんと片付けておいた方がいいでしょう。

5-3 去勢と避妊について

繁殖予定のない犬はすべて去勢か避妊手術をしたほうが飼いやすさが違います。シーズン（発情・生理）中に外出できないようでは困るからです。

一、去勢

オス犬の去勢は6～9カ月頃を目安にしていますが、基本は足を上げて排尿をするようになる前に行うことです。個体差がありますので時期についてはそれぞれ判断が必要ですがわからなければ7ヶ月で去勢します。やはり暮らしやすさが変わります。

二、避妊手術

メス犬の避妊手術は1回目のシーズン（発情・生理）が終わって1～2カ月後に行います。手術の際の出血が違いうらしいのですがこれも個体差と技術でしょう。

三、メス犬のシーズン（発情・生理）について

生後6カ月から16カ月頃に始まりますが個体差があり一概には言えません。

約3週間続きますのでその間室内ではナプキンを付けたパンツ（男性用のパンツでも応用できます）をはかせておきます。

シーズンを確認してから10日目から15日目頃が排卵の可能性が高いので、その前後を含め散歩や逃亡には十分注意します。特に逃亡については、これまでそのような素振りを見せなかった犬も来客時にドアの隙間から逃げ出すなど本能に押されての行動がありますのでくれぐれも用心してください。

四、病院選びと手術（オス・メス共に）

①病院は日頃から相談しやすいところを選んでおきます。

②手術の都合がいたらあらかじめ予約を済ませます。予約の際、検便・検尿も申し込み、また、まだ乳歯が抜けていない場合や切除が必要な腫瘍などがあれば同時に診てもらいます。便と尿はあらかじめ当日のものを容器（フィルムキャップなど）に入れて持参します

③当日は朝食を抜き水も与えないで病院に連れて行き、麻酔から覚めた夕方には引き取ることができます。

できるだけその日の内に引き取ることができる病院を選んでください。手術後の体力が落ちた状態で泊まることにより、ケネルコーフなどの感染症にかかることがあるからです。但し、術後の経過が思わしくない場合はためらわず獣医の指示に従ってください。

④お薬が出ますので指示どおり飲ませましょう。これを飲むとビックリするほどおしっこが近くなる場合があります。

⑤1週間～14日で抜糸ですがその間傷口をできるだけ舐めさせないでください。

⑥散歩はオス犬の場合手術の2日後から、メス犬でも3～4日したら出掛けて構いませんが、短めにし、抜糸までは激しい動きをさせないほうがよいでしょう。尚、季節や天候により路面がぬれている時は散歩を控えます。

さて、第2章はこれで終わりますが、どんなに大変な犬でもこれから必ずいい方向へ変化していきます。あなたがこうであって欲しいと犬に望むことをイメージし続けてください。

何かの仕事（例えば新聞を持ってくるとか買い物袋を咥えるとか）を教えることもできるでしょう。今まで犬に与え続けてきたのですから、これからは求め続けて下さい。その代わり座るとか呼んだら来るとか、日常のごく小さなことにでも「そう、えらいぞ」の一言を忘れないようにしましょう。

第3章 イエストレーニング

1. 概要

魔法の訓練ではありませんが、十分な理解と使い方次第では確実に愛犬とあなたの関係をグレードアップしてくれます。

ご褒美(報酬)を用いるトレーニングをよく見かけると思います。それらは例えば「オスワリ」と命令してよくできたら「えらいね」とか「ハイ」とか言いながらドッグフードやジャーキーを与えています。イエストレーニングはこれと似たようにもみえますが、考え方と結果がまるで違ってきます。

トレーニングの手順は後述しますのでここでは基本的な考え方を理解してください。

①キーワードを作ること

「これからあなたにフードをあげますよ」という意味の短いキーワードを決めます。キーワードは犬の名前とか「よし・ほれ・はい・いいよ」など日本人が普段犬に対して使う言葉であってはなりません。ここでは『イエス』という言葉にしましたが、ウィでもハローでも構いません。逆に英語圏の人は『よし』でいいわけです。

裏を返せば『イエス』以外の言葉(無言も含む)では、仮にフードを差し出されても決して口にしてはいけなことを犬に教え込むのです。

これによって他の誰でもないあなたとあなたの愛犬だけに通用する秘密のキーワードが生まれます

②予期しないときに「イエス」

犬との散歩を見ていると、犬の好き勝手な方向へ引っ張られながら歩かされている飼い主が少なくありません。言葉をかけても犬耳？東風。その声が脳まで届かないのか、聞こえていて無視しているのか、ラブラドルの場合そんな犬が多いようです。

そこで、イエストレーニングの基礎すなわちキーワードの理解ができたら、散歩中に犬が全く予期していないときに「イエス」という言葉をかけます。「えっ？貰えるの？」という顔して振り向けば、ゆっくりとフードを差し出し、改めて「イエス」と言って与えます。タイミングとコツを会得するのに時間がかかりますが、その後あなたの犬は「イエス」という言葉を聞き逃すと損をすることになるので、歩きながらも意識の半分はあなたに注意を向ける可能性が高くなり、これでしつけの基礎ができるのです。言うことを聞く聞かないは別にして、少なくともあなたの声は犬の脳に届くことになるわけですから。

このトレーニングの基本は不意打ち、つまり予期していないときに「イエス」を使って主人の言葉に耳を傾けさせることであり、逆に期待しているときは知らん顔をすることです。

イエストレーニングは1人暮らしの場合を除き、基本的に奥さんが家族にも内緒で行うことをお勧めします。いろんな人がそれぞれ勝手にやって犬に混乱を起こさせないためと、もう1つは散歩のとき引っ張られたり、言うことを聞いてくれなくて困るのは奥さん、しかも犬の世話は殆どしなければならぬのも奥さんだからです。(我が家はその反対と思われる方は、どうぞご主人が行ってください。また、僕が子供の頃そうだったように、犬と真剣に向き合いたい君なら是非頑張ってやってみてください。)

③報酬として使う応用

犬は食べ物による報酬(好きな言葉ではありませんがいわゆる餌で釣ること)で人が期待する行動も起こしますが、皆さんはそのうち(あるいは既に)彼らに理性と知性それに尊厳があることを感じるでしょう。

私が最後に訓練した盲導犬もそんな態度を示していました。

「チェアー」という命令で視覚障害者をイスのところまで誘導し、ご主人が座席を手で確認するまで犬は座席に顎を乗せて待っているという課目です。このように複雑で犬が何をすればよいのかわからないことを教えるのにイエストレーニングはとても有効でした。

私は頭の中で作業の工程を分解し犬に教え始めました。

第1段階 誰もいない静かなホールに椅子を1脚置いて、5メートルほど離れたところで待たせた犬にも見えるようにしながらフードを1粒その座席に乗せました。「チェアー」と言う命令とリードで促すことで、彼女は椅子に近づきじっとフードの粒を見つめています。「イエス」と言うとそれをペロッと食べました。座席を軽く叩きながら「チェアー・チェアー」と繰り返し言葉の響きを覚えこませます。これを何度か行くと、チェアーの命令で椅子のところまで誘導するようになりました。

第2段階 ところがせっかくチェアーへ誘導しても、私は「イエス」と言わなくなりました。すると「早く言ってよ」とでも言うかのように彼女は椅子の周りを回りはじめましたが、「違う」と首を横に振る私の顔を見て今度はオスワリをしました。まだ「イエス」と言ってくれません。その後も彼女はフセをしたり椅子にお手をしたりと試行錯誤を始めました。自発的に考え行動しているのです。しかし残念なことに座席に顎を乗せるという行動を彼女はこれまでに経験していませんでした。そこで私は犬の右横に並び、左腕を犬の後頭部に乗せるようにして軽く抑え、右手に持ったリードで誘うように曳きながら彼女の顎が座席に触れるようにし、すかさず「イエス」と言ってフードを与えました。これを何度か繰り返すと、顎をチョンと乗せるようになりましたが、すぐにこちらを向いて「これでどう？」という顔をします。そこで最後に彼女が顎を乗せたときに「マテ」という命令をすることで、彼女は私が期待した行動を完璧に行えるようになったのです。これまでの間およそ20分弱です。

第3段階 1日か2日この訓練を休みます。私は経験的に犬というのは犬舎（ひとりの場所）で仕事を覚えると感じています。その日に教えられたことを彼らはきっと犬舎で思い出して考えているのです。私は熟成と呼んでいるのですが、彼女もまた3日目に一発でチェアーの命令をこなしていました。いよいよ最後の段階です。ホールに複数の椅子を置き、1つを除いて荷物を座席に乗せます。空いている椅子に誘導できれば成功です。次にホールから出て、居室や食堂・事務所など様々な場所で、これまた様々なタイプの椅子やベンチで練習し、できる度に「イエス」と言ってフードを与えていました。

ところが、ある時から彼女はフードを期待しなくなり「イエス」と言っても目でチラッと私を見るだけで、満足そうに顎を乗せたままチェアーの姿勢を保っています。

「ごめんな」と私は謝り、彼女の頭を優しく撫でてあげました。

「ご主人、もういいですよ。チェアーの意味はもう充分にわかりました。私はあなたが微笑んでありがとうって言うだけで満足です。」確かに彼女はそう言っていました。

犬とはそういう動物なのです。

長い余談になりますが、室内で生活し社会経験が豊富で家族からいろんなことを教えられたり、犬自身が試行錯誤を繰り返して身につけたこと、それは時に大目玉を喰らうほどのいたずらであったりするかも知れませんが、そんな風に育ちしかもご主人に畏敬と信頼を寄せている犬を、私は脳が解発された犬と呼んでいます。

私の家にエリーという盲導犬の適性から外されたラブラドールがいました。来客に対して吠え続けてしまうので、初めは叱ったり呼び鈴と同時にフードを与えたり訪問者のあるたびにジャーキーをあげてもらっ

たりしましたが効果がありません。

そこで逆の発想から、「吠えろ」という命令を声符（声の命令）と視符（身振りの命令）で教えてゲームにしました。元々遺伝的な要素で吠える犬でしたから年を取るまで吠えるのは直りませんでした、「もういい」と言えば止めるようになりました。

エリーはまた家族が寝静まると夜毎ごみ箱を漁っていました。

ごみ箱に紐を巻きつけ、その先をバケツに結んで、悪戯をするとバケツが犬の頭に落下してくるような天罰ともいえる仕掛けを作っておけばこの問題はウソのように解決するのですが、私は面白半分に細長い紐を彼女の首に付け、その先を寝床で自分の足に結わい、時を待ちました。

初日は入れ食いです。

ドアを閉め寝床に就くや否や、ぐぐうっと足を引っ張られました。

「こらあ！エリー！」

本当にビックリしたのでしょうか。ささあっとベッドに戻る音がします。

2日目以降はさすがに彼女も様子を探っています。徐々に時間が経ってから足を引っ張られるようになりました。

が、数日のうちにこの楽しいゲームは終わってしまいました。時を見計らっているうちにお互いが深い眠りに落ちるようになったからです。

またある日こんなこともありました。

寝ているエリーを残して買い物に出ようと車庫へ行き、ふと忘れ物に気付いて部屋に戻るまでの僅か数分間のことでした。ドアを開けた私は一瞬何事が起こったのかと目を疑いました。台所の床が一面真っ白で白い粉が空中を漂っています。

「わっ！」という自分の声に驚いたおかげで冷静さを取り戻した私は、じっくりと観察を始めました。台所から続く白い粉は足跡となってエリーのベッドまで続いています。こちらに背を向け丸くなっているエリーはいつもより大きめのイビキをかいていました。

「こらあ！エリー！」と怒鳴りましたが、私との駆け引きが既に名人の域に達している彼女は動揺も見せず「なあにさあ、うるさいわねえ。せっかくないい気持ちで寝てるのにい」と眠そうに私のほうを振り向きました。

その顔にはまるでタヌキのような小麦粉の化粧がされていたのです。

腹を抱えながら抱きしめてやったのは言うまでもありません。

悪戯がバレ叱られることが分っていながら、なお逃げようともせず人と関わり続ける犬。

絶えず家族の様子を観察しているのだろう、タイミングよく自分の要求を満たしてくれる人に寄り添う犬。家庭内に陰悪な空気が漂い始めると、とりなすように人の間を行き来してはお互いの緊張をほぐすのに一生懸命な姿を見る度、犬とはなんとすばらしい生き物なんだろうと思う。

2. イエストレーニングの実践

一、開始時期

離乳後、固形物を食べれるようになった頃から老犬に至るまで健康でさえあればいつから始めても構いませんが、仔犬を初めて迎え入れたときは、3～4日して家に馴染みウンチの状態が安定していること

を確認してからです。

本書では既に一緒に暮らしている犬の内、飽食の時代を代表するようなグルメ犬は対象にしていません。もしそのような状態で犬と暮らしておられる方はダイエットを兼ねてこのトレーニングを始めることをお勧めします。つまり食生活をきちんと管理し、食事前にはお腹が空いた状態で与えられたものを喜んで食べる犬らしい犬にしてからということです。愛犬が好きな食べ物で美味しいと思えるものをいつまでも美味しいと思う権利を奪わないほうがいいでしょう。好きな食べ物・健康によい食べ物も人と犬が満足するまで与え続けると嫌いな食べ物・身体に悪いものになってしまうのは世の常です。

二、準備するフード

盆踊りに行くと子供には菓子袋が渡されます。中味は大した物ではないのですが、もらえること自体に喜びを感じて出かけたものです。この盆踊りをイエストレーニングに置き換えると犬たちが喜んで訓練を受ける様がイメージできます。一般的な訓練読本に書かれてあるような『訓練は犬が飽きる前、始めてから5～10分で切り上げましょう』というやり方とは少し違います。この訓練では素人にでも試行錯誤しながらゆっくり楽しんでトレーニングができるのです。もちろんお腹一杯になるまでの訓練は無理ですし、訓練には快と不快の落差がどうしても必要になりますので、不快である『ノウ・いけない・ダメ』は必ず教えなければなりません。これについては後述しますが、多くの家庭では犬に対して不快を与えるのが不得手な方が多いため、イエスにより快を高めることで不快との落差を出しているのです。

ところで、子供も成長してくると菓子袋の中身を問うようになったり、1回50円で肩たたきをしてくれた子供がアニメ番組が始まると100円でも無視してしまいます。実は此処のところがプロとアマチュア、使役犬と愛玩犬、脳を解発された犬と普通の犬、畏敬と不敬（ご都合主義）、快と不快に結びついているのです。人間の子供は別にしても、犬に対してはいよいよとなった時は主人に従わせることができ、その上で普段はぐうたら犬だったら最高で、4～5歳くらいまでにそうなればいいなと思います。

ともあれ準備するフードを決めなければなりません。

- ① ラブのように何でも喜んで食べてくれる場合は、普段与えているドッグフードで充分です。
- ② 食が細い犬や反応が悪い場合はベビーボーロとか1センチくらいに切ったジャーキーを使います。
- ③ チーズやその他の好物は特別なときに使いますので、好物が何であるかを確かめるのは構いませんが、普段は与えないようにします。
- ④ 犬の体質に合ったものでなければなりません。
- ⑤ ポシェットやポケットに入れることができ、あまり油汚れしないものの方がいいでしょう。

三、手順

第1段階（基礎1）

誘惑のない場所、例えば家族を送り出した後の自宅の居間などでフードを20粒くらい用意します。（与えたフードの分は次のごはんから差し引くこと）

- ① 1粒のつまんだフードを犬の鼻っ面に持っていき、「イエス・イエス・イエス」と言いながら犬の口にねじ込みます。これを連続で5回ほど繰り返してください。イエスの言葉以外たとえば犬の名前を呼んだり、その他一切の声や笑顔も出さないでください。
- ② 次に「イエス」と1回言ってからフードを与えてください。これも5回ほど繰り返しますが、今度はそれぞれに10秒ほどの間隔をおきます。この時犬の目と耳を観察しててください。「イエス」という

声に反応しているかどうかはそこでわかるはずですが。

③ 次はちょっと難しいかも知れないので集中してください。

あなたが立った状態で自分の胸から喉のあたりにフードを保持します。犬が飛びつこうとしたら横を向き、吠えたら2～3歩移動するなどを繰り返しながら、犬が自らオスワリする姿勢を誘発します。この時も一切無言です。

座るや否や「イエス」と言ってフードを与えます。犬が諦めて興味を示さなくならないよう、また飛びつかれた時にフードをまんまと取られたり「キャー」とか「ダメ」とか言わないように注意します。

生後30日の仔犬にもできることです。

犬に考えさせるのです。

主人の顔を見上げオスワリをすることで「イエス」の言葉が出てフードが貰えることを。プロで5分から10分、初めての方でもその日の内にイエスという言葉と、貰う際にはオスワリすること覚えさせることができるようになるでしょう。

注意事項：訓練終了後、悪ふざけや確認の意味で「イエス」と言って反応を確かめたり、言葉だけ言ってフードは与えないということがないようにします。それは訓練の消去を意味します。

第2段階(基礎2)

半日後か翌日に行います。もし訓練途中で手についたフードの匂いを犬が気にするようなら、その手で犬の顔を撫ぜまわしてグチャグチャに可愛がって、臭いの所在をボカしてください。

④ 前回の②か③をやってみて「イエス」に反応することを確認してください。

そのうえでフードをつまんで犬が届く高さに持ちます。すかさず食べようとしますので絶対に取られないよう手を引くか指先で鼻っ面をピンします。「マテ」と命令してもよいのですが、私なら犬に考えさせるほうを選びます。キーワードがないときには貰えないこと学ばせるのです。そして勝手に取らない瞬間ができたらずちに「イエス」と言って与えます。その時間が5秒くらいになるまで間を取りながら行います。

⑤ 次に④と同じようにフードを犬が届く高さに持ち、今度は「よし、はい、ほれいいよ」あるいは無言で差し出したりします。この時もすかさず食べようとしますので④と同じ対応をしてイエスのみが許される言葉なのだということを理解させます。他人から餌をもらわない、奪わないの1助になるかと思えますし発展させれば拾い食いの防止にも役立つはずですが、犬に考えさせる訓練をしているわけですから皆さんもこの方法について考えてみてください。

⑥ そろそろ基礎の仕上げに入ります。室内で犬があなたに注目していないときで、しかも何かに夢中になっている頃を見計らって、「イエス」と言います。この時は犬が自ら近寄ってきてオスワリの姿勢をとることを求め、それができたら与えるようにします。改めて確認しますが犬が要求しているときには決してイエスは使わずに無視し、予期せぬときに使うのがポイントです。

ところで愛犬のごはんの時ですが、この時は差し出したごはんをすぐに食べ始めても叱ったり取り上げたりしないでください。せっかく楽しいイエストレーニングを厳しい訓練にしてしまうと食事のときにも食べないで気を利かせてじっとしてしまう犬が出てきます。これだと将来どこかに預けたりしたときに、じっと食べないでいて「早くイエスと言ってよ」と犬は思っている相手には通じないという悲しい現実を引き起こしかねません。ですから愛犬のごはんの時にはこれまで通りお預けなどせず、食器を押さえて話し掛けながらの楽しい食事タイムにしてください。

「イエストレーニングが混乱しないのですか？」

大丈夫、犬というのは幅広く考える動物です。

さて第2段階の最後です。

予期せぬときに「イエス」と言って犬が反応し、近寄ってきてオスワリをしたら、あらかじめ手を伸ばせば届くところに置いておいた入れ物からフードを摘まんで与えます。さらにフードを取りに行く距離と時間（5秒から15秒くらい）を徐々に延ばします。犬が動かないように「マテ」を教えるチャンスでもあります。離れたところにフードを取りに行ってから与えるときには改めて「イエス」と言ってから食べるのを許可します。イエスというのが「これからあなたにフードをあげますよ」という約束手形のような意味合いを教えるのです。これは犬があなたに集中する時間を維持することと、将来、お店の前に待たせておくときなどに役立ちます。

イエストレーニングを行う際、犬の名前を呼んだり他の言葉も笑顔も出さないようにお話してきました。その理由について説明します。

犬というのは人の心を自分に向けさせ、引き付け、さらに操る名人だと思います。

「よおし、今日はパッとやろうや！」宴会部長みたいな側面があり、犬好きな人というのはさらにそれに乗せられやすい性格です。しかしこれから始めようというのは宴会ではなくトレーニングです。また余談になってしまいますが、ある年、目が見えなくなって日が浅く、まだその現実と悲しみを充分乗り越えていない女性の訓練を担当したことがあります。入所して4日目の夜、訓練は思うように行かず、「目さえ見えていればこんな辛い思いをしなくて済むのに」と机の前でシクシクと泣いている彼女に、彼女の盲導犬が近寄り鼻先で肘を持ち上げたり太ももに手をかけながら「クゥ〜ン」と声をかけました。「お前には母さんの気持ちはわからないよ」「クゥ〜ン、クゥ〜ン」「どうしたの？」「クゥ〜ンクゥ〜ンクゥ〜ン」「慰めてくれるの？母さんの気持ちはわかるの？」「クゥ〜ン、ワンッ！」彼女は犬を抱きしめ、犬はされるがまま身体を預けていました。その後二人の間にどのような時間が流れたのか分かりませんが、翌日から吹っ切れたように彼女は歩き始め、無事卒業しました。今は2頭目の盲導犬と会話を楽しみながら生活されています。さて、犬のこのような魅力を知るとついつい話し掛けてみたくなるものですが、今はそうなるための基礎作りです。人の言葉や笑顔に犬はすぐに反応し、挑発したり興奮して舞い上がってしまいます。ここはぐうっと心を静め、「マジだぜ」という雰囲気を作ります。冷静で余計な言葉を使わないほうがイエスの言葉も意味も犬に伝わりやすいのです。多く人は犬を褒めるのが下手で、「よ〜し、よ〜し、ヨシヨシ」、興奮させるのはうまい。「そう、よくやった」と冷静に今の行動を評価し満足感を犬に持たせる状況作りができていないことが多いようです。身体ごと喜びを表すばかりでなく、ニマ〜っと喜びを噛み締めることも必要で、このときに犬は成長するのです。

第3段階（応用）

これまでのところが室内で十分にできるようにしておきます。時間帯はランダムにし全くイエスを使わない日もあった方がいいと思います。熟成、心理学でいえば強化になります。

⑦ いよいよ外でのトレーニングです。興奮していることが多いと思います。本当はコントロールで犬を我に返し冷静にして欲しいのですが、そうもいかない飼い主もしくは犬が殆どでしょう。今後の目標として頑張ることを条件にイエストレーニングを行います。

興奮度が高い犬の場合はいつものフードからお気に入りのフードに変え、それを持っていることを犬に予め知らせておきます。大いに期待しているわけですからその時はイエスを使ってはいけません。あくまでも予期せぬときにでしたね。予期せぬときといっても犬は知ってるわけですから、それなりに期待

しています。散歩のときのイエスは10回程度で次のようなときに行います。

a 犬の目(気持ち)が主人から離れ草むらの匂いや落ちてるものに気が向いた瞬間(どっぷりその状態にハマッている時は、感覚は遮断されていますから効果はありません)

b うまく歩いている時

c オスワリなどの命令をして従っている時(途中で立ち上がったたりしたらあげない)なおご褒美(報酬)にあたるこの方法は全体の2割程度に留め、あくまでも不意打ちを主体にします。

注意事項:犬が猛烈に興奮して聞く耳を持っていないときや、犬を放してしまっても来ないときには使わないで、イエスに反応する確率が高いときや放した犬が戻ってきた時などに使います。「イエス!イエス!お願~い、イエスだから食べてちょうだい~!」なんてことにならないようにしましょう。

⑧ 訓練への応用になり報酬の意味合いが強くなります。この章の1-③『チェアー』トレーニングの中でおわかりのように、知らないことを犬に教えるときの導入の手段として用います。既に覚えている命令に対し、餌を見せて「オスワリ!オスワリ!」などと犬を餌で釣るようなことがないよう期待します。

フセを教える:片膝を立てるか低いテーブルを利用して、犬の反対側の床にフードを持った指を置きます。犬が潜り込んでフセの状態が誘発できるよう静かにいろいろ工夫してください。フセの状態ができたなら「マテ」をかけてその状態を維持し「フセイ、フセイ、フセイ」と低く静かな声でゆっくり言葉をかけ「イエス」と言って与えます。これを何度か繰り返し、犬の理解が進んでいることを確認します。「わあっ!できた!できた!」と大騒ぎしないで黙って息を吞んで見つめていてください。次にフセの状態ができたときにフードを持っている指のうち中指から小指までを伸ばし、床から10センチほど持ち上げてはまた床に戻す(上から床に伏せることを促す)動作を3回ほど繰り返しその間「フセイ」という命令語をゆっくり繰り返します。視符と呼ばれるもので手の先で犬に命令を伝えているのです。片膝もテーブルも必要じゃなくなるように時間をおきながら練習します。その日はそれでおしまい。熟成の期間をおいて確かなものにしてください。

これをマスターした後のフセの動作は、まず座らせてから行います。あなたが立った状態で犬を座らせ、片手の人差し指を立て腰の高さから斜め下の床のあたりまで上体を屈めながら指差し、同時に「フセイ」と命令します。指示どおりできたら「イエス」と言ってゆっくり上体を起こしながらも、犬がすぐに立ち上がることを予想します。立ち上がろうとしたらすかさずまた同じように伏せさせ、そのままの状態でないといつまでも貰えないことを考えさせます。知らないことを教えるのに「ノウ、いけない、ダメ」の言葉は一切必要ないことは既に理解していただいていると思います。できるようになったら数秒の時間をおいて改めて「イエス」と言って与えてください。

人間には命令魔が多いようです。自分の気まぐれやどうでもいい時、あるいは来客で犬が興奮しているときに「フセ!フセ!フセ!」と騒ぎ立てて訓練を台無しにしてしまう人たちのことです。自己満足だけを求め、相手を犬ッコロとしか思っていないのでしょうか。

ソファに腰掛けたときに愛犬がおずおずとやってきて、自らが伏せようとした、あるいはそう思った時に静かに「フセイ」と指示し「えらいぞ、ありがとう」とつぶやいたら、もう「イエス」など必要でなくなるのですが。

3. 限界と制御

この章の冒頭にも書きましたがイエストレーニングは魔法の訓練ではありません。

犬と暮らしていても叱ってばかりで自己嫌悪を感じたり、「こんなはずじゃなかった」と思われている愛犬家、そして誰より初めてレトリバーとの暮らしを始める方々に、犬が冷静で思慮深い眼差しを向け、そのうえで皆さんが伝えたいことを伝えるための基礎をつくること。また、快を高めることで不快との落差を大きくし、不快より快を求める生き物の本能に訴え、将来暮らしやすく且つ考える犬とのすばらしい生活の一助となればと考え紹介したものです。

このトレーニングを盲導犬の訓練で用いたのは私自身の為ではありません。犬が知らないことを負担なく覚えられるようにとの配慮の他、その犬と新たに生活する方に少しでも早く犬が馴染み、イエスによって犬の意識を向けさせることで限られた期間内での訓練がスムーズに行えるようにと始めたのです。

盲導犬の訓練で一番大変なのは、その犬と自分が暮らすわけではなく、素人でしかも犬を訓練するうえで最も必要だと思われる視力が使えない方と暮らせる犬にすることでした。犬の性根を叩き上げ、どんな犬でも盲導犬にしてみせるという気概は持ち合わせていませんでした。そんなことをしてみても怖い人から離れ、見えない人のところへ行けばいずれ魔法が解けるように言うことを聞かなくなりお互いが不幸な結果に終わってしまいます。何よりそんな犬との付き合い方は好きではありませんでしたから。とはいえ快を高めるだけはいよいよのときに制御が利かないのも事実です。

そこにイエストレーニングの限界があるのです。

特に犬が若いうちは人間の子供と同じようにダメなことはダメとはっきり教えなければなりません。否、何がダメなのかを個別に教えるのではなく「あ！母さん怒ってる。これはダメなんだ」ということを犬に判らせることが必要なのです。スーパーで走り回る我が子に「ダメですよ。周りの人に迷惑でしょ」と口先だけで注意して買い物に夢中になっている母親。子供たちは相変わらず走り回り他人から指摘されると「注意はしてるんですけどねえ。でも子供だから」少々ムツとして答える母親。

人間教育のことは分りませんがこれが犬なら許してはおきません。もちろん飼い主をです。

叱るということはとても勇気が要り難しいことです。叱られる側の性格もあるでしょうし気持ちが舞い上がってる時と落胆しているときの叱り方も違うはずです。だからある日突然人前で上手に叱り且つ言うことを聞かせることなどできるはずがありません。できたとしても大声で怒鳴るか泣き出して相手の度肝を抜くのがせいぜいで、決してみっともないものではありません。つまり叱る事はお互いの約束事として事前にどこかで決着がつけられていなくてはならないものだと思うのです。男の場合は「こら、いい加減にせよ」とドスの利いた一言で片付くこともありますが、女性の場合はそうはいかないことが多いはず

人と犬の性格で叱り方というのは変わりますので、文字にすると誤解を招いてしまいます。本書ではすでにいろんところで誤解を招いていると思いついでにとも考えましたがやはりこれは危険なことです。受け取りようによっては犬をスポイルしてしまいます。「あ！母さん怒ってる。これはダメなんだ」と感じた子供の母親と、スーパーの母親の違いはどこにあるのでしょうか。普段から心がふれあい、苦労も垣間見て時に諭される経験をした子供の『母さんを悲しませたくない』との思いは畏敬の念に通じるものがあると思います。

私の犬に対する躾の方法は、普段から注意と警告それに処罰の言葉を使い分けています。

注意：叱るほどもないことだけど、これ以上エスカレートしたら困るかな？という時は「これこれ」との

言葉に犬が反応する程度の重みを加えその反応を確認して犬の気持ちをクールダウンさせます。歩行中にはこの頻度が最も高く、軽いリードショックを使って犬を冷静な状態に保ちます。ある程度トレーニングが進んでから、そして飼い主にも注意力と予想できる経験がないと難しいかもしれません。

警告：止めさせたい時には「ダメだよ」と言います。犬は止める場合もあればそのまま続けることもあり、その際はもう1度「ダメだよ」と強く言います。

処罰：それでも聞かないときは「ノウ」という低く沈んだ言葉が出て、実力行使に移ります。自分が何をしてもこの言葉を発したからには発した側の責任というものがありますので犬に真正面から向きあって叱ります。恐怖を与えないで冷静に、『叱られることを受け入れているか』『何故叱られているか分っているか』を観察します。その後、気分転換をさせて遊ぶこともあれば、突き放したり、散歩の途中で踵を返すこともあります。折り合いは必ず犬のほうからつけにやって来てくれますし、その時の犬の表情とあの何とも言えない態度がとても楽しみで、つまりは長い散歩に出ることになります。このままじゃ『ノウ』が出ると感じた犬はほとんどが警告の段階で自制するようになりますが、『ノウ』まで至った時は目を曇らせ、うなだれて叱られにやってきます。でもそれが彼ら一流の演技であることを私は知っているのです。彼らがそこまで計算し、覚悟のうえの行動をしていることを。そして本当にダメな場合は私が冷静さを失い「こらあ！エリー！」と叫ぶことまで彼らは見透かしているのです。

限界を知り最後は魂と魂のぶつかり合いだということを肌で感じる。何年かして犬と暮らした最初の1～2年は現代社会に残された数少ないアドベンチャーのひとつだったとデレンと横たわる犬を見て懐かしく思い出すことでしょう。

【あとの前に】愉快的な犬たち

名犬ラッシーや101匹ワンちゃんのように犬の行動の全体を擬人化したものを鵜呑みにして犬を理解することは正しい方法ではありませんが、犬というものは優れた学習能力と人と同じような感情を持ち合わせており、部分的には犬が今考えていることをそのまま日本語に吹き替えることは可能だと思っています。私にとってそれは子供のころからとても楽しいゲームで、しかもその後の犬の行動によって吹き替えが正しかったか誤っていたかが分かり、そのことでさらに犬の気持ちを理解することができるようになりました。後に犬の習性や本能といった稟性それに彼らの感情表現の方法を体得することで彼らの行動をより正しく理解できるようになり今でも吹き替えは楽しくて仕方がない習慣になっています。

しかしこのことは私が盲導犬の訓練をしていた頃の弱点にもなっていました。というのは、犬とのコミュニケーションが割と容易に取れるため、集中力や作業意識を高め訓練項目を早く教えることはできたのですが、コミュニケーションによって犬の感性を刺激するため犬が人間との心の付き合い方を会得しそれを求めるようになってしまったのです。つまり利口で感受性豊かな盲導犬にはなったけれども、その犬と出会った視覚障害者は、心通うまでの数ヶ月間、お互いストレスの溜まる日々が続いたのです。盲導犬には水族館のアシカのようにある種オペラント的な調教(たとえ誰であろうと的確な指示さえあればそれに自動的に反応すること)も必要なのですが、私が訓練した犬たちは心の繋がりを求めようとする一心で作業を行い、最後に私の口から漏れる「えらいぞ、よくやった」の一言に湧き出る満足感をかみ締めていたのです。ここにご苦勞をかけた盲導犬使用者の方々にお詫びを申し上げる次第です。ただ、その後の盲導犬との生活が、満たされ、癒され、心温まるものだったであろうと密かに思っているのですが…。

さて、本書の中にも所々に紹介されていますが私がこれまでに巡り会った犬たちにはとても愉快的なエピソード

ードがあります。むしろすべての盲導犬にそれぞれのエピソードがあると言えるし、犬と暮らしている方々にとっては、そう珍しいことではないのかも知れませんが、あとがきを前にそのうちのいくつかを紹介することにしましょう。

1. 今は亡き盲導犬タクトはさりげない心くばりをする犬でした。Mさんと暮らし始めてしばらくすると、交差点があるわけでもなく障害物もない場所で止まることが時々ありました。「変な奴だな」と思っていましたがある時ふと耳を澄ますと『ブーン』という音が聞こえているのに気づいたMさんは「もしかしたら」と思い、その音のほうへ近づいていきました。目は見えなくても経験上それが自動販売機の音であると分かっていたMさんがお金を入れて取り出したものは、何と大好きなビールだったのです。その後も何度か知らない所で試してみると、それはジュースでも他社のビールでもなく、いつものビールであることがMさんを有頂天にさせました。そういえば駅のプラットホームでも手を伸ばせば必ず灰皿があったのを思いだしMさんは本当に愛しくタクトを抱きしめたそうです。「僕が教えたのはバス停とポストだけなのに」と不思議そうに、でも自慢気に話してくれました。タクトは日頃から主人をよく観察し、ほほ笑みながら「よくやった」と言われるときを辛抱強く待っていたのでしょう。
2. 病院へ通勤するFさんと朝の散歩を楽しんでいた年配のMさんが道でバツタリ出くわしました。それぞれの足元には盲導犬がいてなにやら挨拶を交わしていたそうです。世間話もそこそこに通勤・散歩と別れた二人は、その日の天気も良くいつもより快調な歩行をしていました。Fさんは電車に乗り降車駅から病院までを、通学する高校生の間を縫うように歩き、何事もなくその日1日の仕事を終えました。Mさんも市役所から商店街を抜けるいつもの散歩コースを快適に楽しんだそうです。ところがFさんが帰宅すると迎えに出た娘さんが驚いたように言いました。「おかあさん！この子ジニーじゃなくてパールだよ」。そう、朝の挨拶の時にそれぞれの犬が入れ替わってしまっていたのです。しかもパールはこの町で電車に乗るのはもちろん、病院にも行ったことがなかったのです。Fさんを交えお酒を酌み交わした時、額に汗を滲ませたMさんがためらいがちに、でもこらえ切れずニコニコと話してくれたエピソードです。いつも明るく、おーほっほほと『笑うセールスマン』のような声を私に残して逝ったMさんとの思い出ですが、きっとその日1番楽しんだのは2頭の盲導犬であつたに違いありません。
3. パピーウォーキング中のハモちゃんはよくビッコを引く犬でした。家庭訪問の時、散歩しながら犬の様子を奥さんに伺っていると、キャンと泣いてビッコを引きます。慌てて奥さんが犬を抱き寄せて謝っていました。よく見ると、僕が奥さんと話し出すとしばらくしてわざと奥さんの足に自分の手を踏ませるようにぶつけているのです。このような犬は何度か見てきましたが、そこまでして自分に注目を集めさせ、抱き寄せて心配げな声をかけてもらえる至極へのシナリオを犬というのは作り上げるのです。愉快的犬は時にドジを踏むこともあります。いたずらがバレて怒鳴られたとき、やおら立ち上がってビッコを引き始める。高ぶっていた主人の気持ちをほぐらかして調子に乗り、「あれ？足は大丈夫か？」と言われてまたビッコを引くと「さっきと足が違うじゃないか！」。倍返しで怒られる犬もいました。

4. ユーザーのIさん宅を訪問した時、「ちょっと聴いて欲しいものがあるんです」とカセットテープを差し出されました。聴くとそこにはカラオケで演歌を歌うIさんの声が録音されていました。「はあ、そのうち犬が歌い始めるのだな」と思いながら聴いていると、案の定盲導犬キャシーの声が入ってきました。ところがその声はIさんよりも透き通り、メロディーに合わせての高低もあり、誰より切なく演歌を歌いきっているのです。しかも、間奏に入った途端その声は止み、次の歌詞が始まるとさらに陶醉したような恍惚とした歌声を奏で始めるのでした。あのカセットをIさんはまだ持っているだろうか。もう1度訪ねてみたいと思う。
5. 地下鉄が滑り込むような音を聞いたときKさんは、まだ少し手前の階段を降りていた。通い慣れた駅で、その日先を急いでいたKさんは「オリバー速く！」と彼の盲導犬をせかした。プラットホームに着くとオリバーは立ち止まった。「こら、早く、ドア！」。動かないオリバーに見切りをつけたKさんは、ハーネスについたハンドルを放し、リードでオリバーを引っ張りながら片方の手で地下鉄の車両を探った。次の瞬間、Kさんはドスンと線路に転落してしまった。地下鉄が入ってきたのは向かい側のホームだったのだ。幸い大事には至らなかったが転落したKさんもプラットホームに残った盲導犬も傷ついたに違いない。済まなそうに報告するKさんは「オリバーといるとつい見えるような気になってしまっ」と苦笑いをしていた。
6. 私が始めて訓練した犬はバロとラミという犬です。どちらもラブラドルでバロはオス、ラミはメスでした。1週間程の親和期間を経て、いよいよ訓練を開始しました。ラミは遊び心が強い分、好奇心旺盛で『座ること・伏せること・待つこと』といった基礎訓練によく反応しました。しかしバロはプライドが強くなかなか心を開いてくれませんでした。悩んだあげく、ラミとは違ったプログラムを考え、その第1歩として多くの時間をバロの犬舎で何するとは無しに過ごしました。私の存在をバロに認めさせたかったからです。しばらくしてろくに基礎訓練もできていないバロにハーネスという盲導犬が仕事のとくに使う胴輪を着用し、外を歩くことにしました。バロは私を従えるように得意になって歩き始めましたが、段差ではけっつまずき、物にぶつかってはうずくまってうめき声をたてる私を見て、初めのうちは怪訝な顔をしていただけのバロも徐々に私の存在に注意を向けるようになっていました。痛いふりをしながらも立ち上がり、障害物があつたときそれとなく避け方を教え、無事通過できたときは心から喜ぶようにしました。それからのバロはまるで盲導犬になるために生まれてきたように成長し「よくやった」と褒めても「その手には乗りませんよ」と、プライドは相変わらずでしたが、満更でもなさそうでした。一方のラミは順調な滑り出しでしたが、繁華街での訓練で好奇心が災いし集中力が保てず、結局盲導犬にはなれませんでした。もう25年も前の駆け出し訓練士の頃の思い出です。
7. ある年、二人の女性が共同訓練（盲導犬を取得するための訓練）に入所されました。あらかじめ犬の組み合わせは決まっていたのですが、私はお二人に玄関で会った途端それぞれの犬の組み合わせを変更したいと感じました。面接者の報告だけでは得られない雰囲気というものを感じとったからです。過去にこんな失敗があつたという話を聞いていました。教壇に立つOさんには特におとなしいチェリーが選ばれたのですが、Oさんの奥さんは奇麗好きで神経質な方でした。仕事場で1日おとなしくしていたチェリーにとっては、帰宅時にわざわざ遠回りをして十分な運動ができるコース

を選んでくれるOさんが大好きでした。でも自宅に帰ると、今度は抜け毛や少しの汚れをひどく気にする奥さんの視線を感じるようになり、元々感受性の高いチェリーは神経質な犬へと変わっていったのです。そしてついには奥さんと二人きりになると胃液を頻繁にもどすようになり、顔を背けて後片付けをする奥さんとの間に悪循環が始まりました。結局チェリーは協会に帰って来ました。この記憶が二人の女性の犬を交換する決断をさせたのです。ひとりの女性は気難しそうで、さらに難しい年代の子供達との関係がうまくいってないように感じた私は、陽気で人を引き付けるのが上手なエニーに替え、慎重で感受性の高いノベルをもう1人の穏やかな女性に回したのです。期待した通りエニーはその陽気な性格で話題の中心となり、家族にも明るさが戻ったと喜ばれました。感受性が高かったノベルはおおらかで誰からも好かれる盲導犬に成長しました。犬が人を変え家族を変える。どうやら飼い主に似るだけではないようです。

このほかにも盲導犬にまつわる話がたくさんあります。絶望的な手術の後、生死をさまよう主人の脳裏に現れたのは、先に逝ってしまった愛犬が必死にこの世に引き戻そうとする姿であったという話や、力強く振った尾が偶然主人の目に当たり、困難とされていた手術の代わりとなって視力が改善したという奇跡と呼べるようなこともありました。けれども、繁殖ボランティアに始まりパピーウォーカーそして訓練士と多くの人達の愛情に生まれ、訓練された盲導犬が、中途視覚障害という途方もなく大きな苦境の時期を乗り越え、前向きに生きようとする人と結び付いたとき、彼らが見せる行動や心くばりは決して偶然ではなく、裏打ちされたことのように思えるのです。

【あとがき】

25年に渡って積み上げた犬に関する経験と知識の一部をまとめてみましたが、文字にする才能にめぐられず、読みづらかったであろうことをお詫びします。やはりそれぞれの生業としている人に任せるべきは任せたほうが良いということを思い知りました。とは言え、犬の訓練を専門家に丸投げするなどはもっての外ですし、それが出費ほどの値がないこともご存知でしょう。専門家にはちょっとした下準備それにアイデアと技術を頂き、躡るといって一番美味しいところは皆さんが召し上がる義務？があると思うのです。トイレの躡や食事の与え方あるいはイエストレーニングなどは本の横に画面でもついていれば簡単にお見せできるのに、文字にしたことで混乱を与えなかったか心配しています。ただ、映像の場合はそれしかないようなイメージを植え付けてしまいますので、様々なバリエーション・試行錯誤もまた良しとしましょう。

さて、2006年現在、私は札幌でしつけのできるドッグカフェを営んでいますが、食べていくためという現実的な目的以外に、ささやかな夢を抱いています。

それは、欧米のようにしつけのされた犬たちとマナーを守ることができるオーナーが、当たり前のように交通機関やレストラン・テーマパークなど公共の場を利用できるような社会の実現です。

もちろんそう簡単には進まないことは理解していますが、自分にできる課題もいくつか把握していますので、カフェで少しずつ実践に移しています。

そのひとつが、犬のための食事やデザートを提供しないというなんとも当たり前のことです。

ペットショップでの生体販売と同様に、この国のペット関連の人々は今後の人と犬との関係をどう考えて

いるのでしょうか？人が飲食するお店で、たとえ犬用であっても飲み食い覚えた犬のほとんどは、以後そのような場所で大いに期待するようになり、周りの人にとってはとてもうるさい迷惑な存在になってしまいうでしょう。おいしいものを食べさせたい気持ちはよく分かるのですが、それは自宅に持ち帰って食べさせるべきだと思っています。

次にワンちゃん同士の挨拶のさせ方です。

犬社会では当然である挨拶の仕方が、ペット社会で正しいとは限りません。

ほとんどの方は誤った挨拶のさせ方を定着させてしまっています。

犬社会では、強い犬は示威行動を示し、弱い犬は服従姿勢を見せるなど上下関係をはっきりさせます。

よそ者に対して先住権を持った犬たちが取り囲み、臭いを嗅ぎ、必要によっては傷つけ追い出し、場合によっては殺してしまうこともあります。

しかし私たちは野生の王国ではなく、人間社会で暮らす犬たちと生活を共にしているのです。

それぞれの愛犬にはそれぞれの飼主がいて我が子のように思いやり、他の犬たちとも平和的に共存しようとしているのです。

はじき出される犬・淘汰されるべき犬、つまり犬社会の摂理を見ようと思って犬たちと暮らしているわけではありません。

ならば犬同士の挨拶についてもっと注意深くあるべきだと思うのです。

〔デビュー犬に対するマナー〕

いつもその公園やカフェ・ドッグランなどで遊んでいる先住権を持った犬の飼主は、デビュー犬が現れた場合、まず自分の犬をリードに繋ぎ行動を抑制します。そのうえで不安でたまらないデビュー犬が恐る恐る先住犬の臭いを嗅ぐのを許させます。しばらくして、デビュー犬が安定したら、その逆の行動を先住犬に行わせ、それぞれの飼主は注意深く相性を確認したうえで、遊ばせるか引き上げるかの選択をすればよいのです。

〔初めての犬同士の挨拶〕

散歩などで出会った犬同士の挨拶では、決してすぐに顔と顔が触れ合う状態にしてはいけません。たとえあなたの犬がどんなにおりこうでも、相手との相性があることを知らねばなりません。恐らくほとんどの犬たちとはうまくやっつけていけるでしょうが、そうではない可能性も低い確率ではないはずで、万が一喧嘩になった場合、どちらの犬も体だけではなく心まで傷ついてしまいます。特に仔犬や小型犬など弱い立場の犬は、恐怖体験となって一生引きずり、相手の犬やその犬種、しまいには犬そのものを怖がるようになる場合があるのです。

ですから最初は触れ合わない距離を保ち、どちらかの犬に唸りや顔に皺を寄せるなどの変化があれば挨拶は諦め、次の機会を待つようにします。お互いに威嚇行動がなければ慎重に観察しながら顔をつき合わせて構いません。

この段階でどちらが自信を持ち、どちらが不安げかがわかるはずですので、自信のある犬の飼主が自分の犬の首輪を持って、弱い犬におしりの臭いを嗅がせるようにすれば、ほとんどの場合トラブルを防ぐことができます。飼主同士の協力と注意力が犬たちを友達にすることができるのです。

もうひとつは去勢の問題です。

繁殖として用いるか、または犬としての生態を楽しむなら話は別ですが、ペットとして社会参加させるの

であればオス犬の去勢は当然のように考えるべきでしょう。

中には去勢しなくても暮らしやすい犬もありますが、それでも散歩の時のマーキングやメス犬のシーズン時期には大変な苦勞をします。

去勢をすることで、オシッコは1～2回で出し切ってしまうようになりますし、他犬意識や攻撃性・臭い取りも減少させやすく、落ち着きや扱いやすさにも影響してきます。去勢をしないでこれらのことを抑えようとしても、体の中から湧き上がるものをそう簡単には抑えられないし、犬にとっても酷というものです。

生後六ヶ月頃の足を上げてオシッコをする前の時期が最適ですが、7歳でも8歳でもかなりの効果があります。

獣医の中には6ヶ月では早すぎると批判的な方もいますが、暮らしやすさを考えるとこの時期がベストです。

オス犬でも盲導犬に使用できるようになった大きな理由は、去勢の適切な時期がわかったからというのが一つにあげられます。

カフェをオープンしてから私は多くの犬を去勢のために動物病院に送り込むアドバイスをしました。

そのほとんどすべてが、暮らしやすくなっています。

今後は、繁殖を考えている飼主の方へ、その犬が繁殖犬として相応しいのか、相手の犬はどんな稟性の犬が良いのかをアドバイスし、引き取られた家庭で喜ばれるような仔犬の繁殖ができるようお手伝いもしたいと考えています。

さて、最後にお願いしたいことがあります。傲慢で無頓着な飼い主にならないようお互い戒めましょう。ウンチの始末や抜け毛の処理はもちろん、散歩の時、前から歩いて来る人は犬嫌いなのだという前提で予めリードを短く持ち直しましょう。家の犬はおとなしいなどというのは相手に全く関係のないことです。犬が嫌いで怖い人というのはそういうもので、私も首輪をつけた蛇が散歩してきたら、睨まれたカエルみたいに固まってしまいます。

最低限のルールを守り、社会の意識改革を求めることはみんなで主張し、愛犬が3～4歳になるまでには胸を張ってお散歩できる犬を育て共に育ちましょう。

参考資料

給餌について

1) 仔犬の食事量は個体差、フードの種類、日々の健康状態その他諸々の条件で一概に表せないため、仔犬の便や健康状態それに体重の推移を観察し、生後5ヶ月くらいまでは1週間単位で見直してください。

2) 生後60日頃まではフードは柔らかめに。その際、水分量が多過ぎて便が緩くなる傾向があるので必要以上にお湯を入れないこと。

70日頃からはフードの芯が残って構わない。

3ヶ月頃からは堅さに気を配る必要はなく、以後ドライのままでもお湯や牛乳を入れてもかまわない。

3) フードの種類を変える場合、これまでのフードが十分残っているうちに新しいフードを決めてください。

{旧フード7：新フード3} → {旧5：新5} → {旧3：新7} → 新10の割合に3日から5日をかけて切り替えてください。(犬によっては便が緩くなります。その場合はさらに十分な期間をかけてください。)

4) 混ぜもの(副食)は基本的に必要ありませんが、『おいしいものを与える喜び』が飼い主にもあるかと思えます。以下のことを参考にしてください。

① 犬用缶フード、牛乳、煮干し、食パンなどは混ぜてもよいが栄養過多にならないようにする。

② 特に乳製品はアレルギーの原因になる。耳が赤くなったり、おなかに湿疹ができた場合は中止します。

③ 煮干しはよく噛まないで食べると、喉に小骨が刺さり、空咳をする場合がある。不安な方は避けるか粉末にする。

④ 人の食べ残しや、ネギ類(エキスを含む)鳥(絶対ダメ)・豚の骨は与えないこと。豚の骨は好物ですが稀に腸に刺さることがある。

⑤ 椎茸、堅い芋やニンジン、トウモロコシ等は消化せず、嘔吐することもあるので与えないこと。芋やニンジンは柔らかくする。

・混ぜものを勧めているわけではありません。信頼できるものなら基本的にはドッグフードだけで十分なのです。

給餌回数のめやす

1) 給餌回数については下表を目安に実施のこと。

生後3ヶ月までは	4回
生後6ヶ月頃までは	3回
生後8ヶ月頃までは	2～3回
生後8ヶ月以降は	2回

2) 給餌回数が減る場合、当然1回量は増えます。それに伴い排便時間が変わることもあるので2～3日は注意しましょう。